江戸職人歌合　全

∽4
5311

あはれ飛鳥川昨日の淵もけふは
瀬となり現と思へは夢いめうと思ひを
うつゝこそ夢現ならぬ世をや蓮生
の宿にすめる身もとのゝ心にかへらく
ふりし夢の思ひの外の中まて温故
新を知てふ古言を思ひ出ては
いにしへをしのふるためにかくていと

早稲田大學圖書館 昭27.6.30 受 蔵書
門 号 巻 5311
尾崎蔵書

ふりにたれどひさしからなく東ねたり
のしはうすきこゝのわざをすゑながく
とゞむるこゝろみてたどりとつけひとつを
吾いろつをみ君自らうまひてあまねく
うるひなとすれ身は端書せよとこの
しまふものやもあさけはやむること
なりなん思はいなみの丹のいなき給

らんをいつあしむ難波はのよしや
あしやしつぬとよしらむすふての
君にこゝろ山の井のあさきいさとて
ねくしろすかたいいたまわさふ
なん文化五年の夏五月中の五日
伊織の里にて
藤原泰周

娥々月にありても、なつきあやして、くれなゐぬ孤を枕せん方
なりくるしけれバ、墨田川のうき風あき、旅泉よりわと
殺るゝしだゝ成手よりやとヾ出ハ此峯しもいとはやし朝小、
月々がてゝ立いでたまり、西國樗柳樗あとたゝ何年
まじ、従来れ人ハ雨もなく久しきて、行衛のありさまも立べく
てまた待バ風まちとし、んますがも取て雨、水まちへ行と、むしと。
考くも人しがさきもりなれど、ハ娥ハことふるづくしらて私の
薩大きふうらく、また孤だ月たへ何や夜さくの枕して、何
小まつるむきくみしばるても何るまなりりてゝうまでさすと
かきとかへよたや十日の頼あるしを来、ありや游芳な親る

まうでましわざひとつは數〻の人には通釈して物いふらん
いしきをたゝうしやうそそなはりまゐしは書の古筆見
ゆくは和歌の家にして歌なき月にさめくとてありあひ
さるいとなみし西行あるべくは佛乃おま人の枝葉よりそ然
なるもしろおしきてひざいと武まで何ごとそ有り神ふんなき
またしはてせのなかちひちはまし小すそとのわれりと我
なるもくまんせる不さちとかしておぼえつゝいふも何の古歌詠
めでたいひくたふ本まつぬ事どもと志かれる手手何ぞそてうる
いまなりもあるもありてやとまうどきさのひそりふ事行
ぜんふ小やしきし志河ゆるりしまでてそおちくたらむ物語あらし

まるわむげすいひしそで何し夜と物へさてそらな人をとよふ
なげれいたてとゆるからいとうしいかほしすの花よ立る人はおな
し康なるもなよくのふさとを家那さかを見すじれ羽織と
いふ物とかはしうさきめるハ名またそ世のおぼえよやおもとく
をのゝくいひとする宿老なるも我をさしろきいりおびて
風がれと染しなまくなをやりて月ころ之きり志ハぶさ
二ッバろしてはふやり何なきまる男人くよ志りしなきと
志河めて、おのまてのいふなりさうしめ縁春夏秋冬一ことを
なじうもなとしいかひし人もありて一あちとすまひ
霧乃ま夜むるるゞには虫の声木草紅葉まで折り

されてあそびならぬハをかしとなんいひしるすなれどもさきに
うちつゞきをもしれらんぜ給へ下がしもしらくちをも記さし
はやりの情よせひつるゝなるもをかしきなしこゝ月ごろ身よ
しるしてよろづの事をしれりかつゞもるやうなるハわが由なれどもやも
をしやも庭ぞなくしてくさは家も宮こずらうろふん
ひとつさうらのおりまよそくの縁ぞ事もいとをかしくて
をそまじくなる趣と思ひしところよりみちのみん大ひさの
はひろきさへハおもひ前ぶはるゝやいでやわのしとこの序かん
あらぬ川よくくれ君ゝ人よひをおぼしぬるひつるハ佛乃
は詠歌学佛もいらしうつすをとりしき拙きしるへば

うぐひすなきは法楽なりといひやられ　さるものの帰
すのほはしてそのまゝなるくちつきにてとりし起拙讀の
くさひひなし免いそぎはすこしいひてんとおもひなりて行
なきはおひ風ともいはすましく数のくにつまたなどとしてなくなて
こゝろあしくよるすゝおもひあつもんまことにあるまじきしるすまハゞすべ銭
ひ禄ももつるなるべしいふ志し程よりつゞまてまゐらせ
手し寄えそゝろとも年もはやつまりて人々八月とはいはれ
とおもひて月乃影よめん必ややわがすおのまゝらハよきさ女なる者
ましてもすハこ方ハまちわびるとやらいふふさきそれがあはすゝめ
意といふ拙きを世に志めたるハすゝのそもしハ東面志免ん

盛なる秋の夕つかた心のちからをすゞろにかきこゝろみる
多きをかぞへくみの職に、それぞれあつまれることをと待ちゐる
宿にも窓のはしより、あるじを招きてまつはさひきいるゝため
やうやう思ひあはするなかまさん、今はよき人も一夫一妻
いとうるはしくて、海をこえて下さまにはたちまち聞きつべき
事もあまた、まめなど書あつめ、歌よみ人の心はこゝろつよき人情
とりあはせて、相との中にいひて、しなへてと画にてかきのあらはれ
あまねく挿がきし、けちえん、風と恋との二を題にてよみのへと
いふ歌どもにのせたまはせしもの、とりなへちかく
などかいづるあざまへをかし風流様のままなる那もまま。

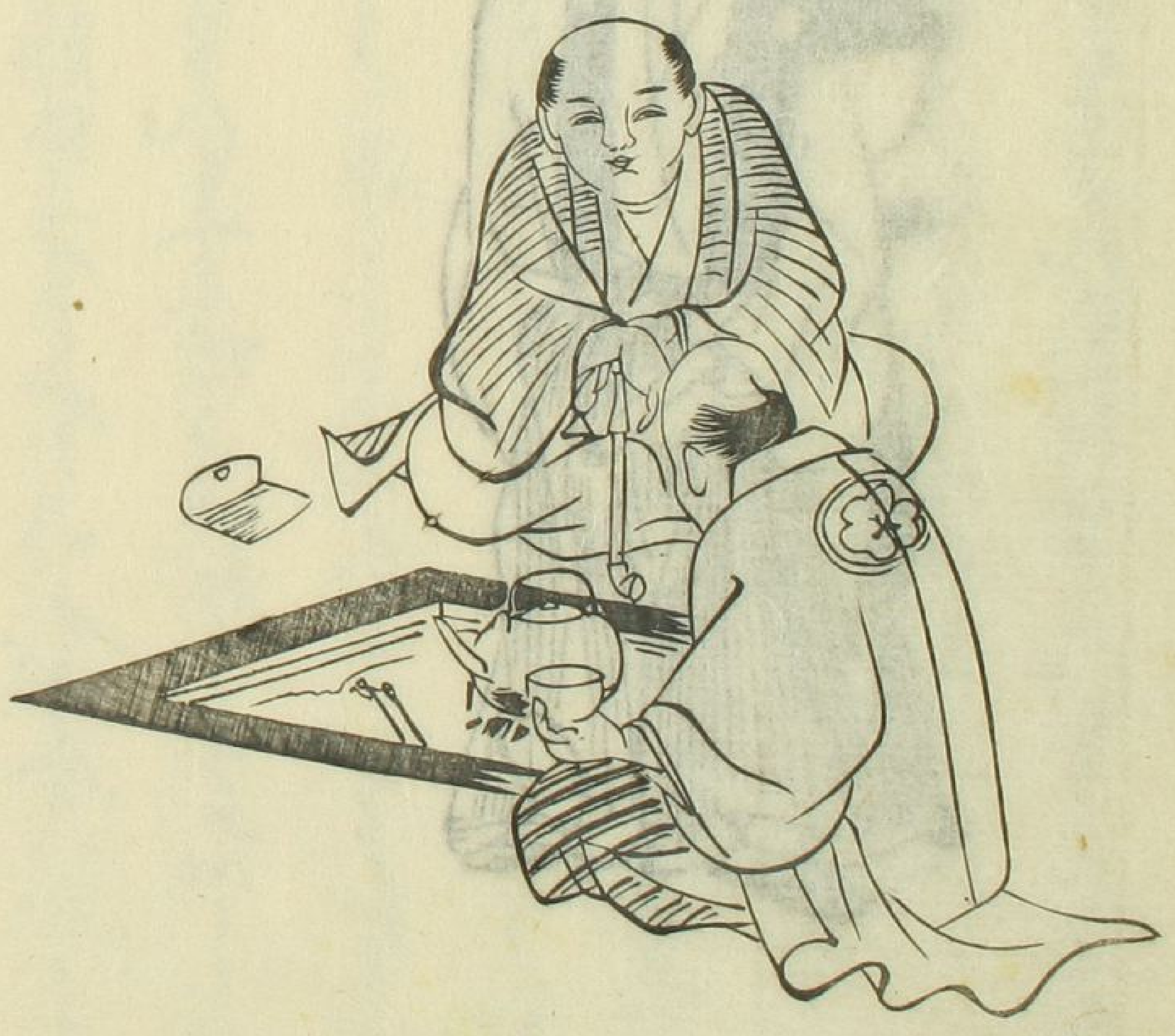
されどうたは花ともみぢとにて、歌合ましまへといはぬもかれがたみ
各主様を判者にたて、雅味もせずや、ただいふ歌合はふるき
ある事にて、雅味ある人は、いかにある判者は
まされど魂よいにしへのままにゆかしく、大事なきは、さもや
を世にあやしきいろかぶれども、名のきこえたる人多し
題はもと画にても、何よりはいはれたるあまたあり。建保
の十二番の歌合あるをよく思ひ、それより職人と歌合よ
み律つきをれを今の世につくれば、おほえぬまで、いつまでも
歌も風恋を案じて、ひとえにおもふあらば、風恋の二つよく
新しき古き例よりなくひとつこそちがあるやうなれどなずらへ婦。

古の名主いふじきものありとみえて、おほせんは陸き
ありし事よ、おほく家ずとも、此津の男よ、女ゟまさる也、
ふるくはしばしの間も知らぬおぼえあるそふ

一番
左 名主

りくぐりゆゑき世を作りて此歌にも月をてらされ
六ッきりのうじ詩うぎさん上ゐるまでうしぶなりけるすめる月影
左右共に判云六ッ限の殿々乃うぎを忘
れん支頗瑕疵なくて判者詩職分ちなりきん
事をいまし免侍るれどもしもや難くれど
下の句るどうん不なまきにはあげるべし左ハ無主が の
読之ゆゑきも絶世を作ぐるど事やりて侍べし
そもも歌合ハ左の一番多くハ勝るるま侍るやうれハ
此製ハ小親王大臣当主人るどこそ初るゆゑ思ふ何る人と
女房など作名しるく一番乃左ゑするを侍りれハ判者も

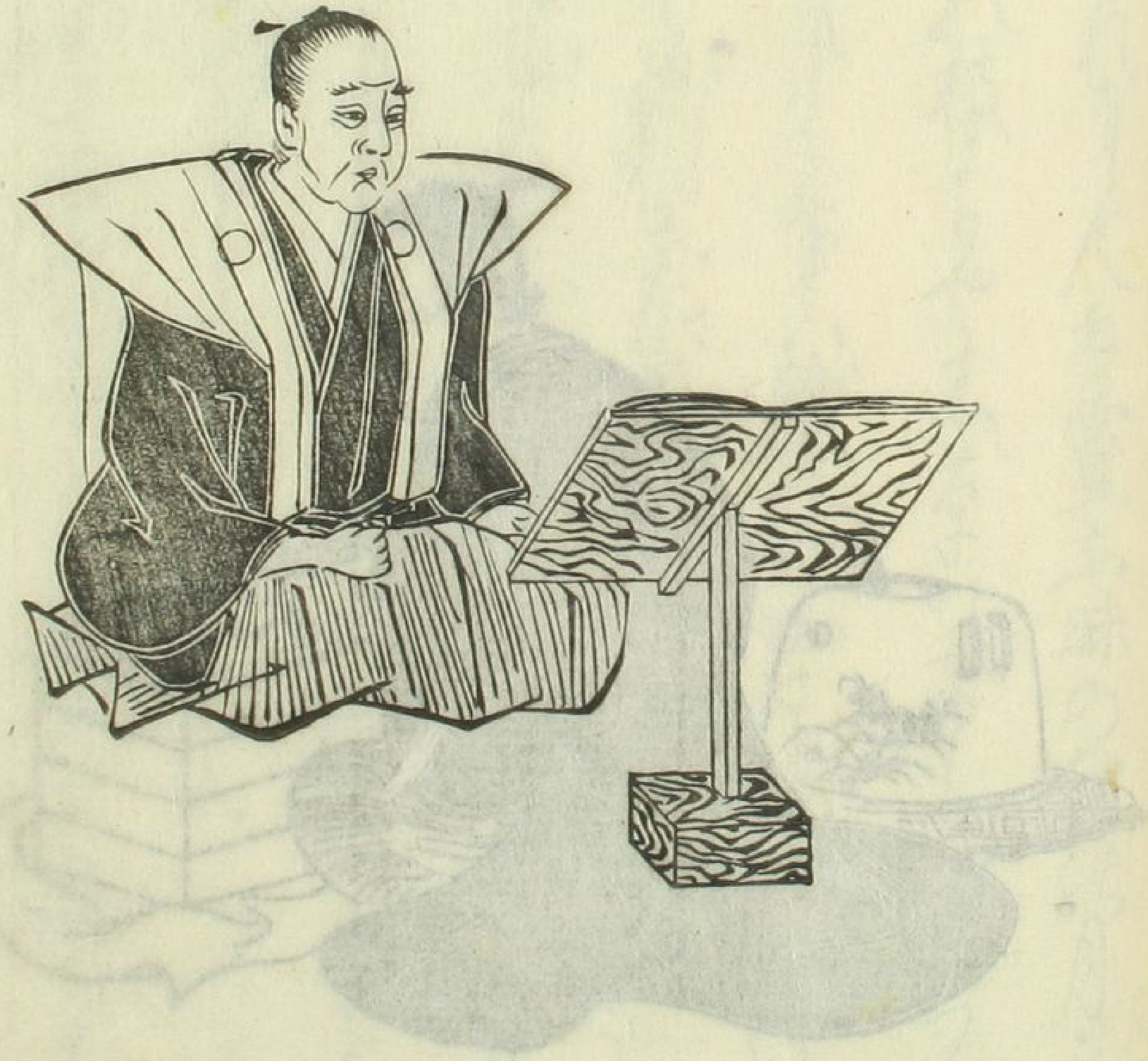
右
大屋



こゝろづくしなる哉云々とよひ家にも寡ハちかよ
何しずむ左右の勝と定べきさまも書取てよそする
哥のまけ持んハ憚あり。春日山なる例よ
准じて勝の字を残ゆるされなんや。
いかなれば人のハ恋入まほしき君もむすびきより下のおもひ捨
おつしよ抱とれをてもおとろへじとうしてたなごゝろにおとなるをめぬる
左右文字 判者云 右上の句大屋のことかう
とゝとしまゐて持なるよ。勝。

二番

左 儒者



右 医者

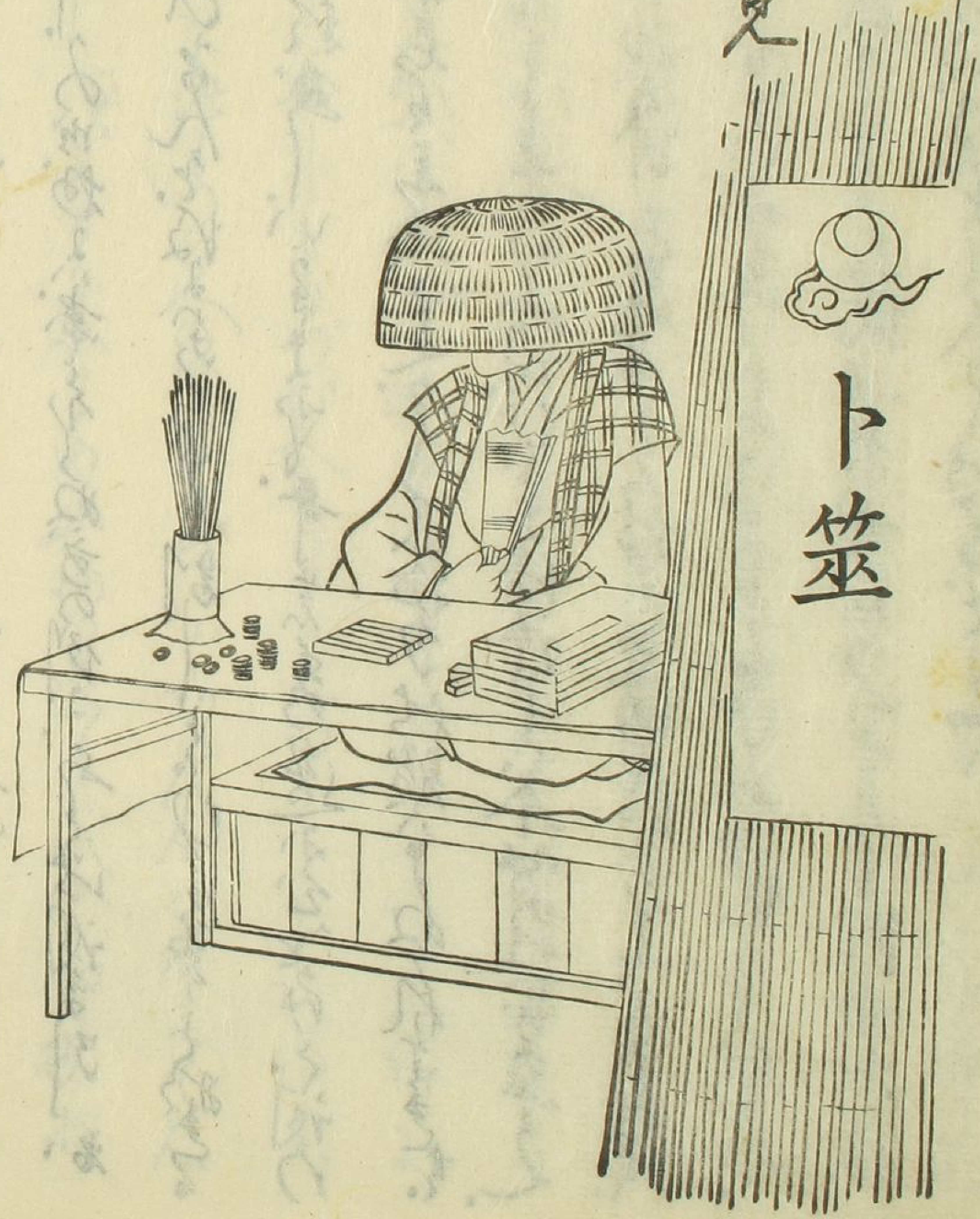
作ごみは天の明徳これあらん。霊ふ昧の秋の月、のぞ
久かたの月からこれ枝よりや本草の書も汁もちら覚え
わかうから及くしき事は職人の腕さるゆゑや。あらん。
左右ともに判あり。判云、左は霊霊ふ昧なれど、これが
なきこと頼待るあるべかれど、一首の姿もしらぬ志
くわぼりしらず。右は月の桂をと桂枝よせまま
あらずれさることとめでし。勝ち待べし。
我ひは東坡をまねぬ詩人なりとも、人をこえぬる
ならぶせく種とは志るや、物重からあまたおこる居藤の袋子
右方中云ざうとも宋をとりたれる。假名をみだれたり。又

我ひとは秘句よよまぬるのしれ侍り。たゞ万葉なる。
判云左の言は雑。さうとも小宋とせられる。假名
ぶ人まことにぶ小宋ハうたかな。近来此作者の職
よりしふくるを穿鑿して皇國の事ハ何にも密法に
のこりけるが。すべての好しけれ社やうに侍るハ歩くの事は
あるまじきべしや。ま二流甲子夜話といふ書と見侍るに。
假名にハ必しもあらずむへうさる氏のよしを記侍き。
此書を世にろの人への流るまりつへ。ぶいけん人ハ称えて見
給べし。或ハ其の悪りといふ秘句おとハ。八雲御抄に。
家集ハといひく。其書よその名を称しもといひ上の言ともで

とかくぬハ何しきさ言乃恩ふそ。何といふ詞とうざる事ハ
前ぶの比判よハ未よれぬ。言の例にふたゝ此詞字引。
のひまんをとはよハおもしろく。判しとぶも有る事とは(?)
なお興しいうきよふも。弄せん多く遂ふ名とみゆく詞乃
禁忌ともあるべきとそうして。秘句は雑ハせぬそれ侍るまじきを。
さうとも此やいふ詞むぎに倍語よく。今時の祝言のやうに。
右ハ此後の言あるらハ侍るまじど酒よひとすべきに候。
けむ古きいふまうてハまさまあげそ使うしずめや。
左のうちハ既に未調。右のくすりも初示に候
あれバ初ぞへて持ちどしや

三番

左 八卦見



右 人相見

山の端にならびし雲を算木にて離中断よりしるき月影

月をこそ今宵しおりに天庭の黒は氣候いよく分しひあかりとは

右に離中断と左申云天に庭は黒く宰きをいとふ天に侍る

きこえたれはりては叙何る事あるべし。月は公には

何せん子由御うけらんに審判云天庭の黒宰は空乃

くもるをおそるも勝るべけれど左申の書右為勝。

下手算木おきてもねても捻ぞ思ふ何をぬ日をくさんなるひみ

いまぞおもひ施仏のこゝろの誰かべて照鏡字人の作まし

右文に離中。左方申云右のうた断感に判云。

左右は哉あまた字見。然ら右方人申状既有優劣

判者も但よろこそ。右の勝。

四番

左 いちこ

右 願人

引たへてミぬ世の物のあはれまでよるや梓の弓張の月
弟日も十五夜なれバ紙の初ひさかたの雲ゐよりつる月影
左右たる雑やし判云左はよるやとハ詞ハしあつめ
たる事なれど職分はひかれ弓の梓ぞとうく
よう挑せるなるべし雖非巨難頗遊卑俗だんハ
上の句字音の他をていふなしぞすずしへさるおか
鳧の名にはん人ども見てもやまとの二ツ牛の角も
なまき人のうすこと葉もいるものと弥ぞのハみのいへるさぬ
左右たふ雑中判云左詞めつらしきたんやさし
よろし持とし定や。

五番

左 青物賣

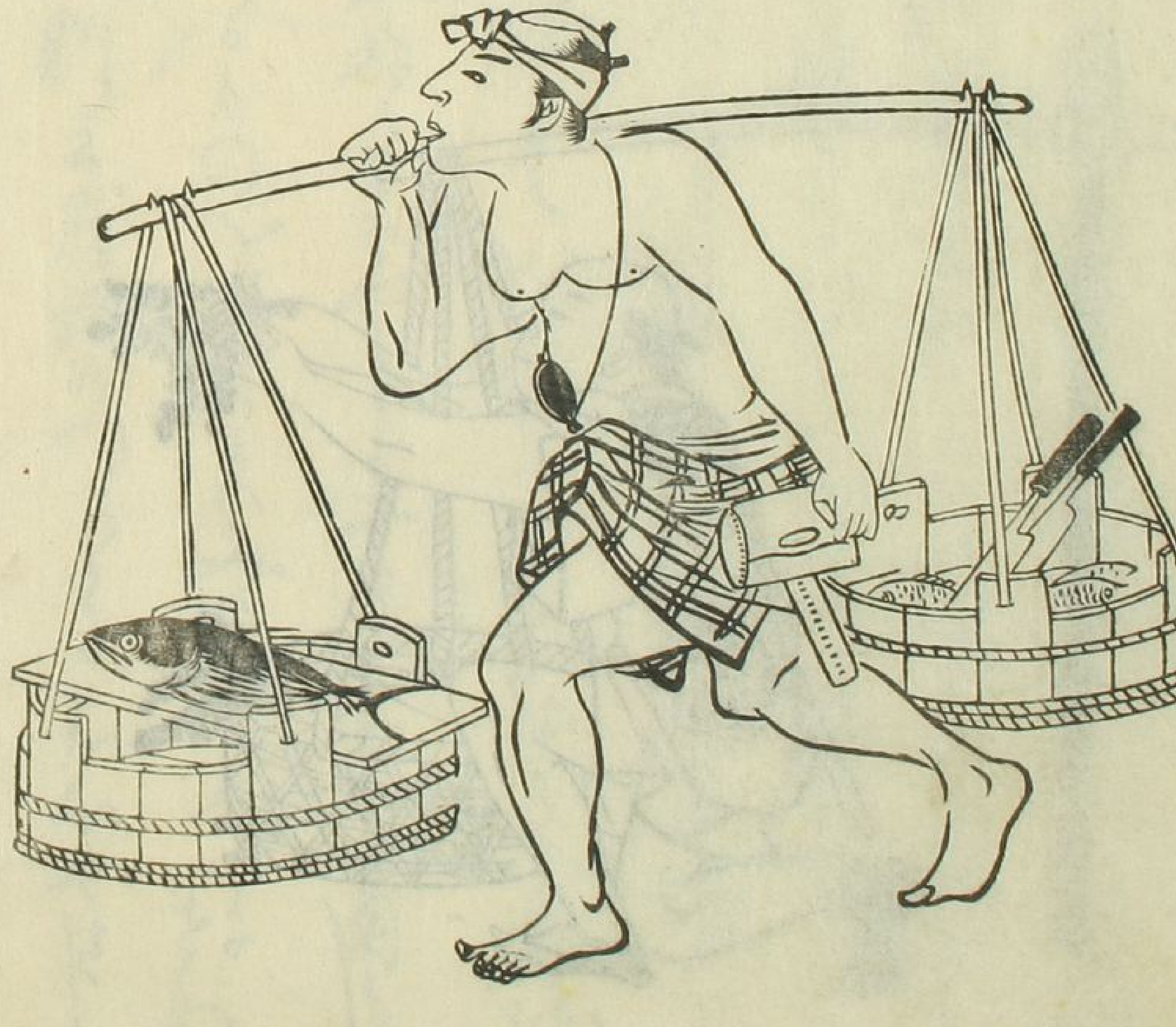
名にたかき葉月のもちハ雲でなほやゝうそころ雲ま待月影
山のはハくまなき月をこしむとてかれのいそぎ秋もまされる

左右共三番 一判云左の歌ながめよろしく侍べし
右まで世上ハ八月十五夜名月と云ひならハし
侍りや更をまちてもよまれけるにや古ひのあかずや
右も月をまちしむ情ふかきに侍る事也 可為勝

帝毎に何首鳥自然薯頭数ハかりまで秋も分かぬげなるころ
乾し入り都ぞ恋し ぬる夕河岸ばんあぢきなしとハいへ河岸ひても

右中勝 左中云なにかきるしとは詞職事
何かはしくや 判云 あぢきなしといふ詞を代

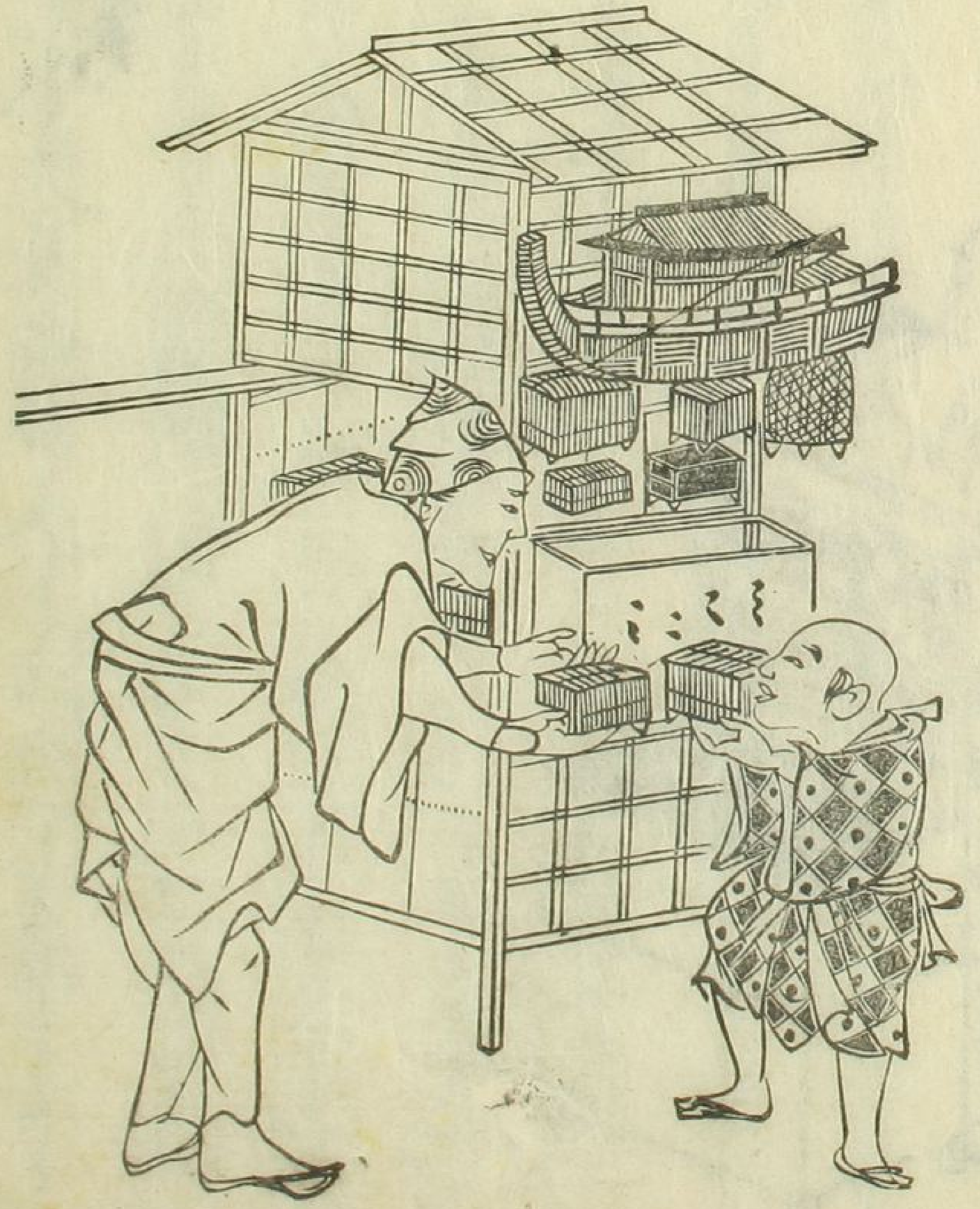
右
魚賣



左歌、よしぬるまゝ侍るや。式部の歌にとまてある。
右もよくいひたてられ侍るを、初句ぞ拙きめ
従消めさせては侍れども、夕がしのやりては死にと
以婦にもじ大切之、自然嚢中頭何首烏は侍るべし。
なほ夕がしの餘さなん、味にはまでは侍るまじ。

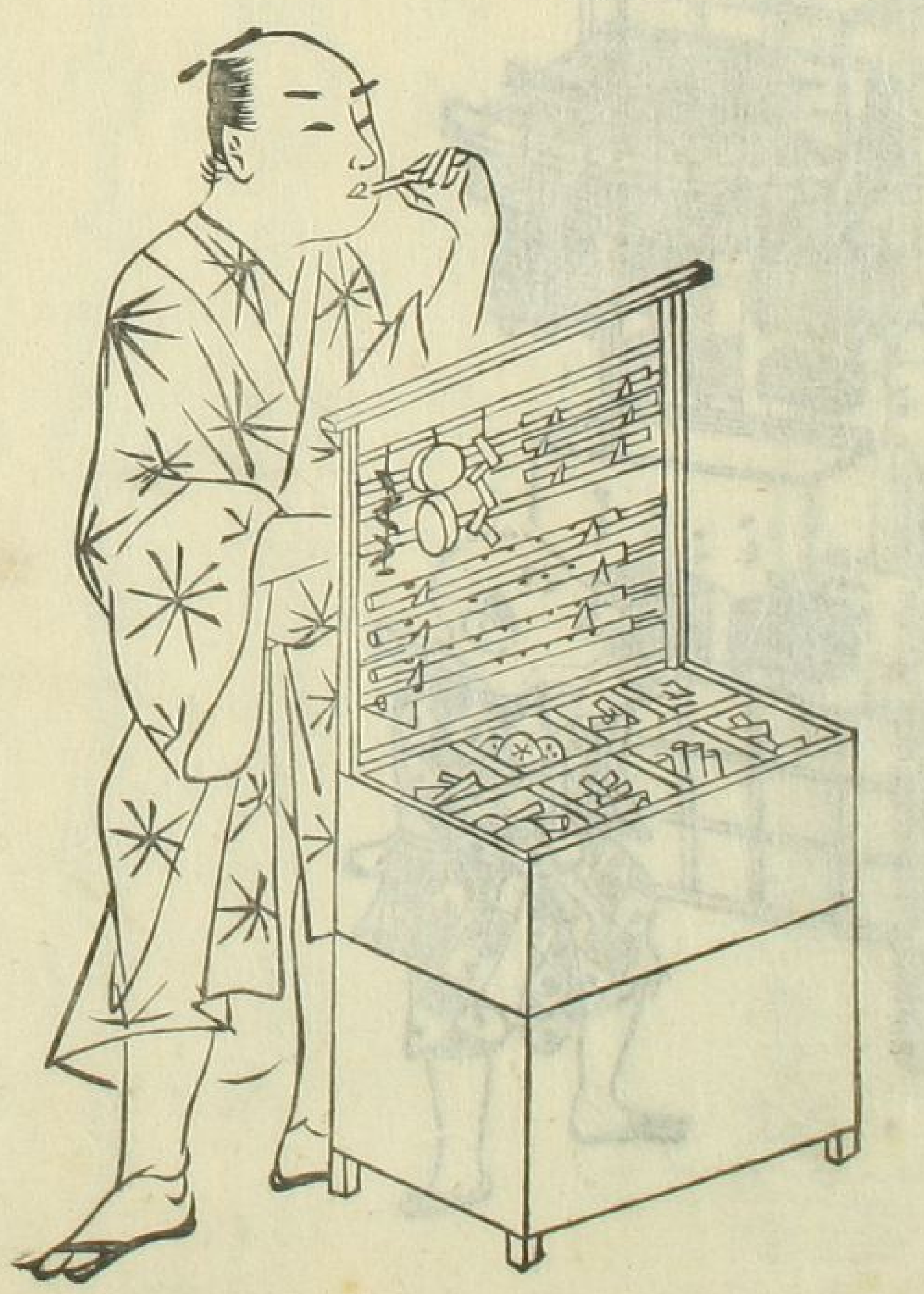
六番

左　虫賣



秋のよなかは遠さと月と好がむましが若へる虫ぶちうるまそうしもる
燭え竹乃よ魚がまき秋も肩されど粉みだこの粧とはおもひ乃あんい
太方頗る感二筆左や云みだいぬ粧とハ世銭らじ
うしと似ふ似ま判云らどの粧乃やはむりし六百
番の読合侍る母頭昭左方より絵粧も多よりも後ぞ
何ぞやぬとよまるあ太方雑やもしと絵粧乃字ゆまり
まく按きなくやちつまよ絵粧もとひとく上も下ふど
立てるハ云邪優よ幾ゆれと味じやまるまされハ
このさやや吉なし俊成卿機と云しるせん賢既ハ
かく然どし今更異論何るべしくしくさ粧とよめる

右 筆賣



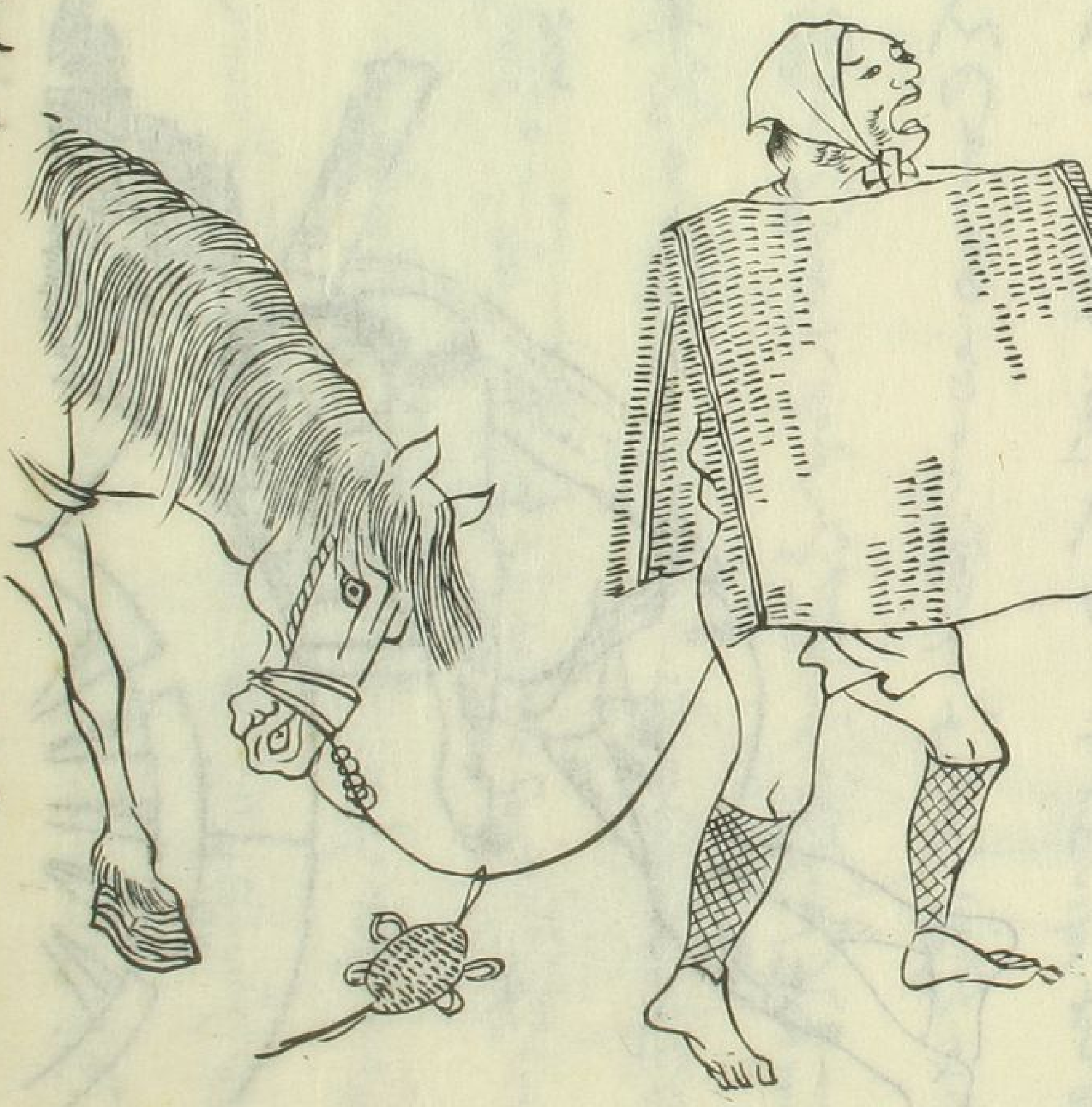
詞にも涼風をつくまじとめぐらして防る事よろしく。
識りやすからん。涼風とのみ有らばいづかへつきせとハよむべし。
雷はそそし初日のなりとのゝともいふ無月けれど。
さやうの事ハ乙殿上人なども得ある事、富家などの
乃初句などハ多くつきせ夜短夜などよせ來るた
御宴よりては耳なれたる事にもしなるから このきはめ
もすべきなれど。その時更に設ある制有べしとぞ
武蔵野こそげなれ小草の月より出るもゐるの葉よ。
いのよくこそ有とても宝作とのうつすは道理そしる
やしいかでかまこ出べきを尾くなまけんづつあし。

末べき詞は林に見ゆるハ雲の上は前栽之ゝる
此詞の事ハ何ごとも思ひはるゝのまんばかるが母
作にて侍るよしそのとどかしハ其の儀式侍
おまけ此部斯の宗幽をぬきていふのうちの事まま
侍るにやすがん事ハつゞ見本やめも様なくかの
大かうも唯作者のひるやん右乃下秋は夜とし
短夜とおもひれまらん月は見情いはず。
たまへる虫はされと秋ハすゞむるものと云
うしろきんしんハ婦りし。まさ持まて侍らし
ひともまして日と婦る虫とすゞ虫はいりなりの末は要ぞ

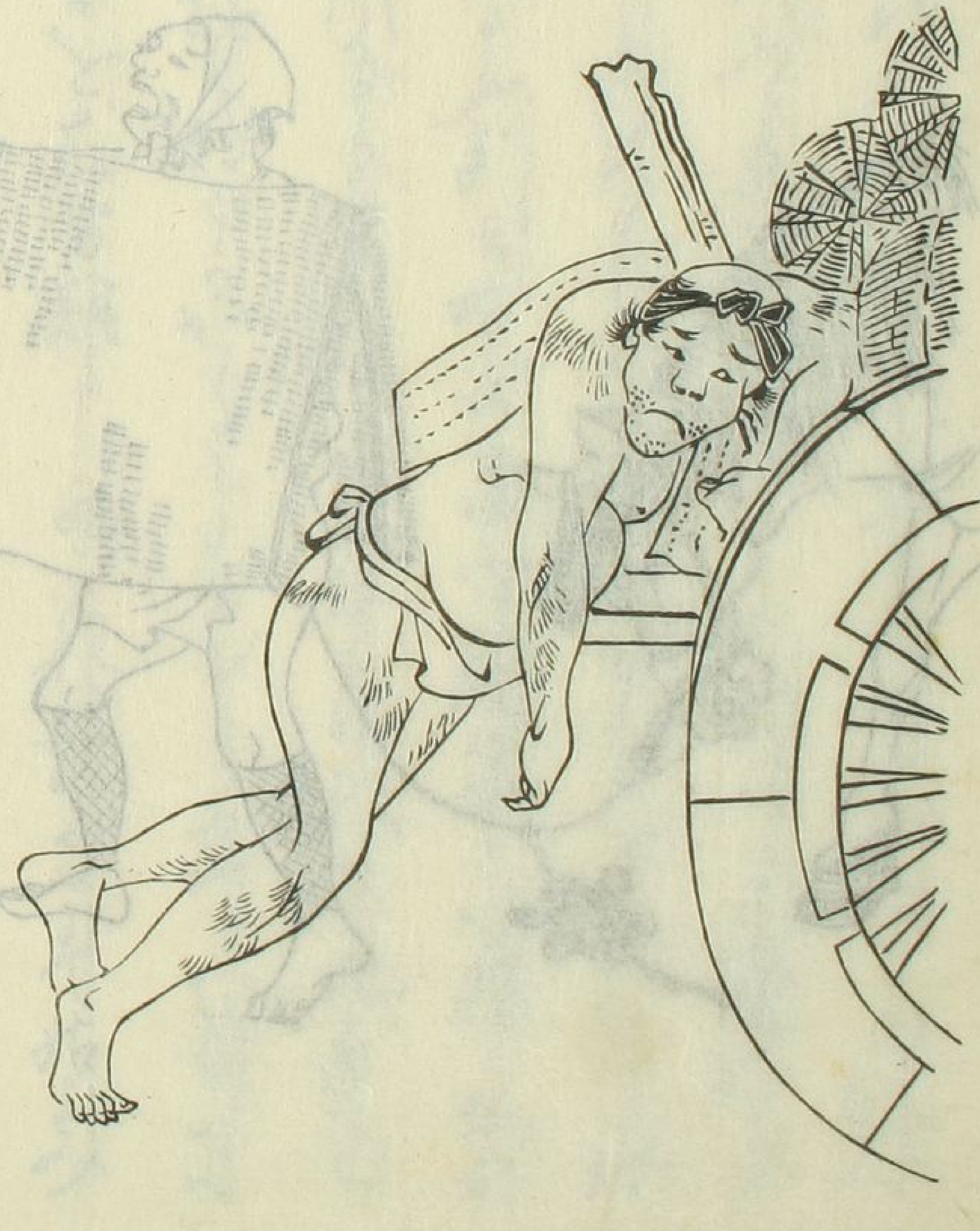
姨捨にならむ句に恋の心はひとつと持ならは秋のこゝろなかるへし
右ハ一字は残れる恋とすむしの聲つき優にして
むしや左ハ只むなしき恋の心はひとつとなりて
てる月ハねて判云右ハ右首の蝸牛を帰宅の
情まことおもひなしのとゝ勝れたる先とし
かのかなしさ彼方のかくもしまさらし論は句なし
恋の心はひとつと左の方雖も是は二の句まで始より
する歟とつゞけるを句は猶雖も為荒涼にや
左方の句は残れる恋といひまとふもよくも侍らず
右ハまさるを持と為し

七番

左　馬方



右 車引



田舎なるこのへさはくれぬ口綱のあかずも夜をかけし月よひきを見ん

蓄て引材木車露しげき月ほうつしや上荷なる荷葬

右申云左方無指難左申云右詠尤感公

判云左右のとるもまりて持て右を勝と定申

さは理すまれの弱と勝とはせざりし律にぞ我につける引よりん

られ木つむちらし車にぞ捨るともなかにゑ草そ重荷なりける

左右又無難判云左右ともに其姿ある歌

まはるが中にゑ草とちらし車に七車とか待し

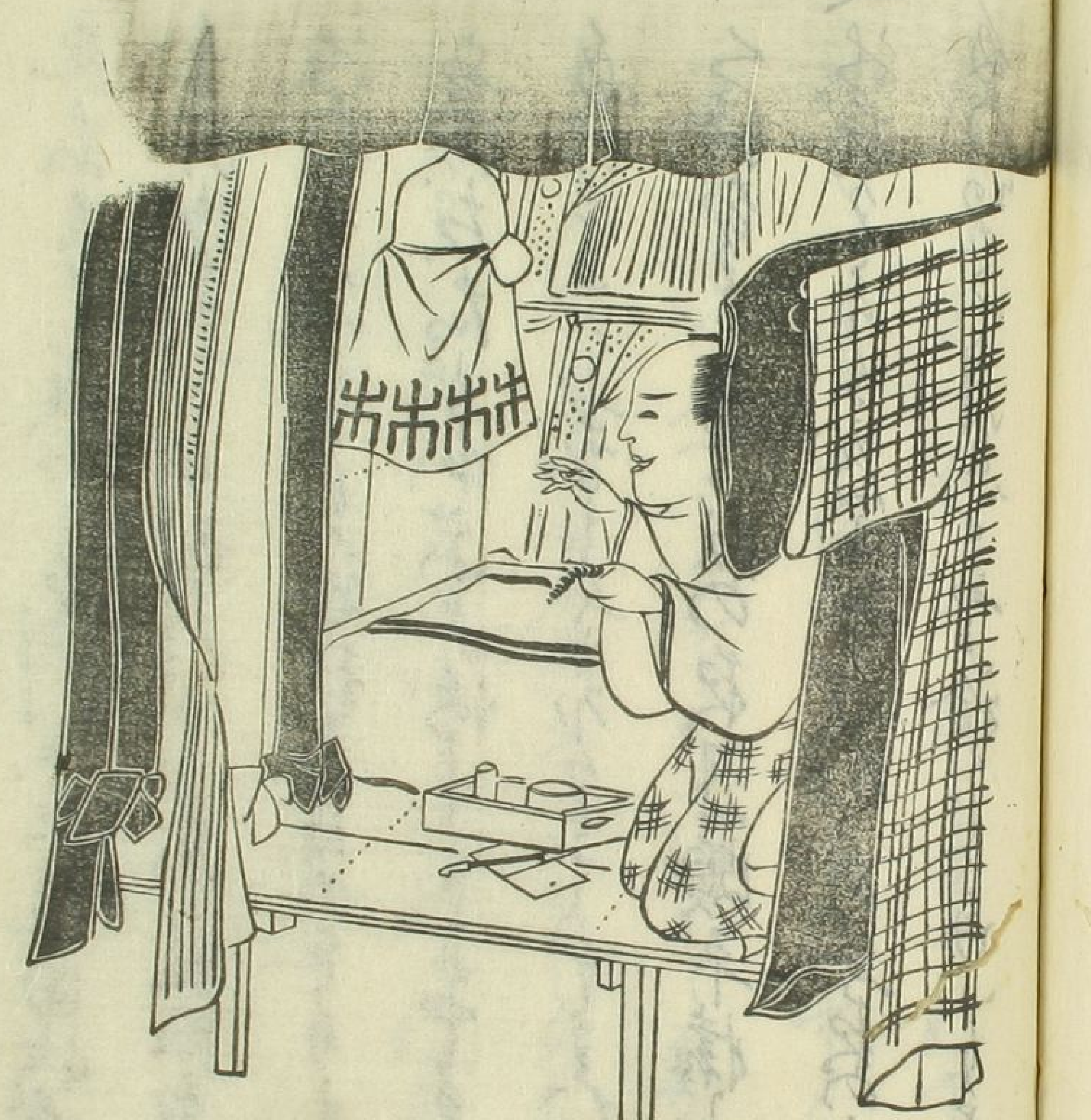
古こともいくもいひけれへ抔まて二あ待る邪つなぎ引

せんなるよりもちらし車まさりける持

八番

左 呉服屋

右 ふるぎや



植田将監内将はしめしもくまなくみゆる蝶の夜乃月

土手よりまる柳の一葉ちりそめてこなたに枝かるゝと月ぞかたふく

左右歌とも感心し思判云左植田将監内将海

邊の色よふとりかさねたる景気限なし右ハ柳の

はまちるより秋秋乃月のかけりまたん又何とふ

ふ深左右ともにおよび難しきみやこまて右は深め

みけるくまなくとかまてをもむ秋称した八

く清なることなる秋の夜月頗平懐りや右勝へし

何つくへの秋のそらる波よおもひあるあふ秋の床と あるハよし

ほしつゝ夜乃何をて月ハとぞる拾しとけりと何をのぞん

右方云左方何とやらんさきらぬやうなり右やしか

秋句何もまか俗なる里判云左方これとりの夜の

床とくいふべうかきるゝと詞をまろ右方ハ秋句

のやうにおもはるを方合の當也うしとおもはまし

何かかまんなとのしうや八侍るる左の夜具

尺まらぬよつきなる右為勝

九番
左 女郎

右 藝者

切立は花の盛ぞ来ても行まじし櫻かげそふ峰のしらくも
秋風に吹なびきなん小はぎの露は岸に逆ひもしろうきことし
左右歌二首判云左哥秋の風情をつくされたる
吉原は全盛なれば女もの哀し右月に逆のこゝろ
浮雲興つきて左右も左為勝
いふせん売しゆりしうらふるも在めの露くよすひとつとば
三線の吹きみれなば挑灯まんにこぼすか我ぞ知れ郎しさ
右中云いふ丹挟んいのぢせんとよむへしといふ人のあり
いかゞ左哥二首判云いふぢせん出といふ婦の詞あまを
いふぢもむかしよく果たるいかにもあるまそ可申ると。

秋の夜もすがらでも出ちかちの寄せうつしやなさるゝハ
いきせんとい女発句は優なるに尋なまじはるゝ
面白きや行つむいはぢかうもいうかるゝ詞をさえぎる
おちなくいふぢ挟みもれんとていち挑なし。はこそば
よいこの家へ来りしかども婦にやまとのなる妻の
めでまさあるは作者は懐に縣なる事に何せん詞に
るすかもいうべきに左方執着にあるじたまそ詠しまやう
に侍し残けるうたの物の待るばとよまつる詠
ひらじがやで挑灯なまじぞ同じ病にや左は
ふ女来し為勝

十番

左 夜鷹

右 船饅頭

晴る夜ハ護持院原の土手の松霧の底に月そうつれる

清水と母の奥おもて祢宜ともひかかる白妙なる雪の肌　歌

右　霧ハ蒼く晴にひかりの月好もしけれと判云

ところ何もなく好ましう思ふ事ハ侍らん、かの月

の人めにも未なる所しかれとも、おもかけ侍るもの

をやすからし、左歌ともに侍ると思ひ侍り、難

侍りかたくとも、左ハ立まさりて侍るへし。

そのさま白手拭の類かふりてあるハ人を帰へる小袖

浮世絵にも見ゆるさまなれとも、代隣乃物の志るしなる

右中云左の頭詞ハ中、体云詞のかなしき所かなし

何もそれ侍なり、左右ともに雅也、判云、職人の歌なり

まつる頭ハ白き職よりまさる歌ハ、みやひたれとも

いかにハせん、候ふへくも侍らんかし、よみ人ハ詞を花に

人知のしく詞つゝき思ふ事も、ゆかしく思ふ

所なしとのこそ、はしめに左方そよきよし、ひたすら手拭を

以て文都の手習ひの手そ職とよりて侍れと

俗語を耳にもしらぬハ心も思ひ侍らすや

又その里ハ手拭の類かふりハ、物云ふなとも侍れと

能若乃職人にまさりし、かなしくも詞のかとあり、侍らん

何もそれと侍るハ心も持ちて、そのやうに勝とす

左織多

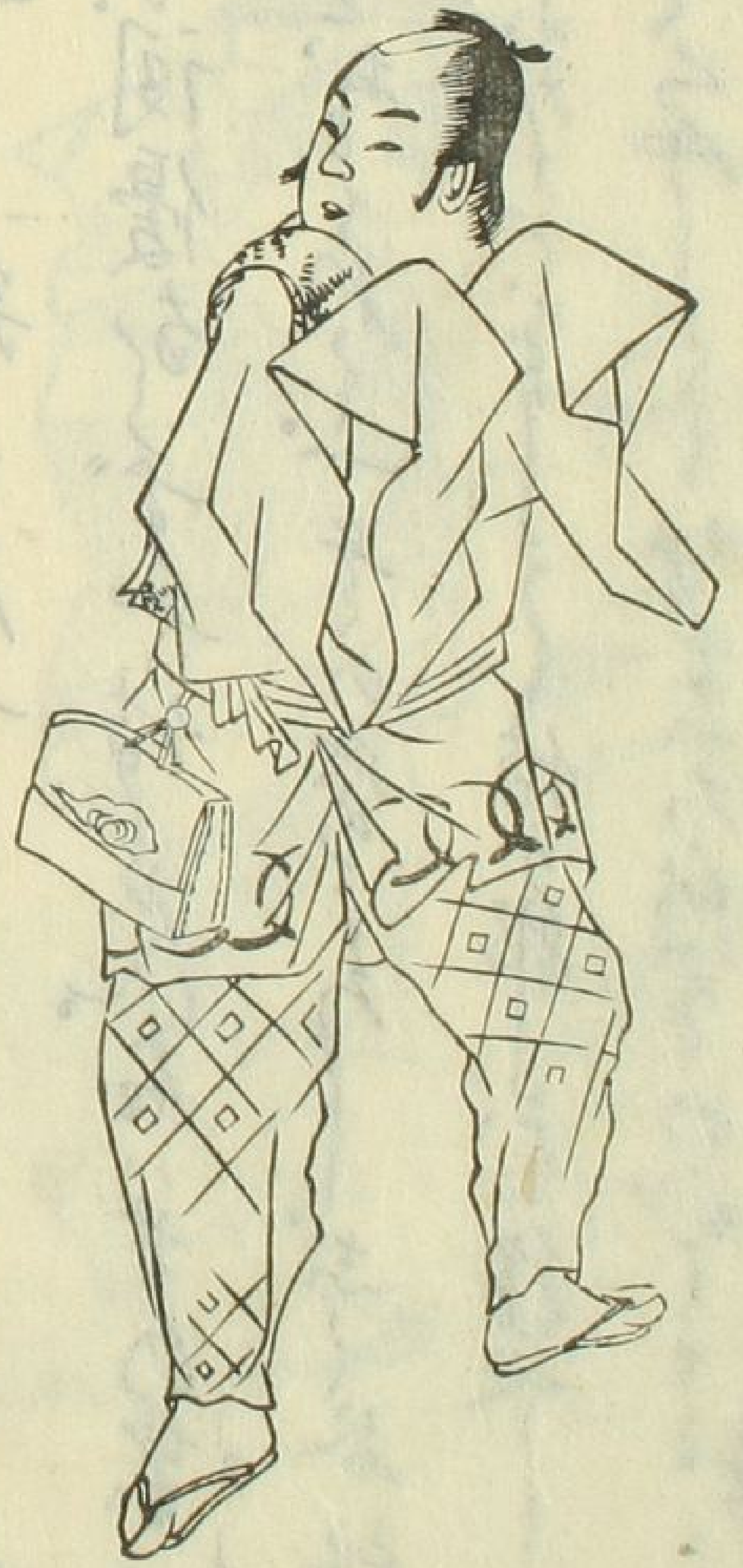
云すまんなとりてハあぐらかきたる人までも好めるに
のぼしゞをはさて頭の風俗もまぎらはしく成
宗家などをとまるぐ文明以後としひ給ふ
通しけるはずなを近く大深めらし精緒べし

序新に一枚かゝるうきたゞとはさぬるまちのなまなる　講人
竹やぶをかきわけてすゝめまなぶ谷ごしのやまにのぼる序新
左右とも無難也　判云　左ハたゞざらるまゞにも山
と侍るあはれ詞優なりといふべし。右は芦の葉
に吹こゑを、ききわけ一その節のよろしく　谷越
二度も吹ならずとも、侍の部にて勝べし
暁の月のあれもなくて、かしくもはなれ太鼓をわかちるまゝ
ままにわたる人目つかはくてつゞやむ旅のこゝろの中ばすぎて野さ
左右無難　判云　はての太鼓はかけまくもとりしき
はゆる夏の月の明、勝あるべし　右為勝

右乞食

十二番

左 やき石



右 卟煙

役引にうつ詠に見ゆこの地乃絆をのみしくハおもしろく言葉
婚李畠も纏の家よりおこえてひのこまじりに月ぞちりける
右申云この纏とハたすぞふるかば侍る舞ふ左陳云
串ほ八角にかぎりいふすの也左申云右哥ハきかひ
この吾感ハ判云左哥この三地の事表裏に詠ゐふど
普通にハ窠霰なりとハいふかんきしどあしられ地なるまん
乃ちんといへなしるも猶まさえられバきやうの吏
たといふくにまれまゝそれハ地に織まさる哉なしけば
歌あつれ地ともいふ右哥の詮の役引いふめ過ぎたれば
まなハず又役引なと侍る名人うなる事にまさ哉地と侍るハ

かうめなるまぜありといふ名人達のなすがまほぬれ
おすくや屋づて角つなぎといひて雑なくや右のよ
右哥左方真中さるかひのこまじりまゐ月のちりけるは
ハおもしろやハ侍らぬ一首のさまいにしへはなきこ
まで此の神に火勢乃かきろひこみましらく
なぜしへ分けぬる持

人妻よこのろしんとふびらねて夜る鳴打すが名人津く
火事とてて打つやかむもとその拘鳴の声よりもちかく
右申云打つと名人子細ありと承るいかに左申云打つ事
屋もんとハ火見の太鼓を打する詞なるべしや判云

侍しどめの事さゝせる子細はありともおぼえ侍らず。
大抵ついでとなれば、なほあしくて、結句詞のわづらひ侍。
歌おほく見えば、歌ならぬ物おほく心をもする事
よくいふことのこゝろもなりなだらかづゝ徒とならで
其ぐちもちまきし名はさまあれど、早晩見はてゞけ一途之。
初心のかたゞよくいかなる所へもまじりならぬ事もさこゆる
まゝや詩ぞうりの秘するびは何と繁何でまでもせず読
叶かの一とりこのるべし。はかりしふかれを林たせず詞
長しく十道しかえぬ抽選し。上の句までりけしと申すては
ある口のまもかのゝあまれど、当職の詞打返ブツコム了リツかまる。

堂築に様なれど、ちるふふ雅なるのゝ那しまじきぞ。
なじめそうしても侍らん。左方は浅まるめと詞
まうしたる雛中元にありけ詞にとなくてうる
しまの席にも例そいひなまし、まうへ乃
晩秋之世上にて出しあり帰こと那まじば、西なる
さるべくや。左乃老たる口は歌ならぬ事ゝ也うち
那がめまするは深めいつまに婦の哀れど、右の下まえ
歌雅もおとるむせびてる時まのみじう侍まじ。
立はおもて花にても侍らずや。

十三番

左 楮再ハ丹こき

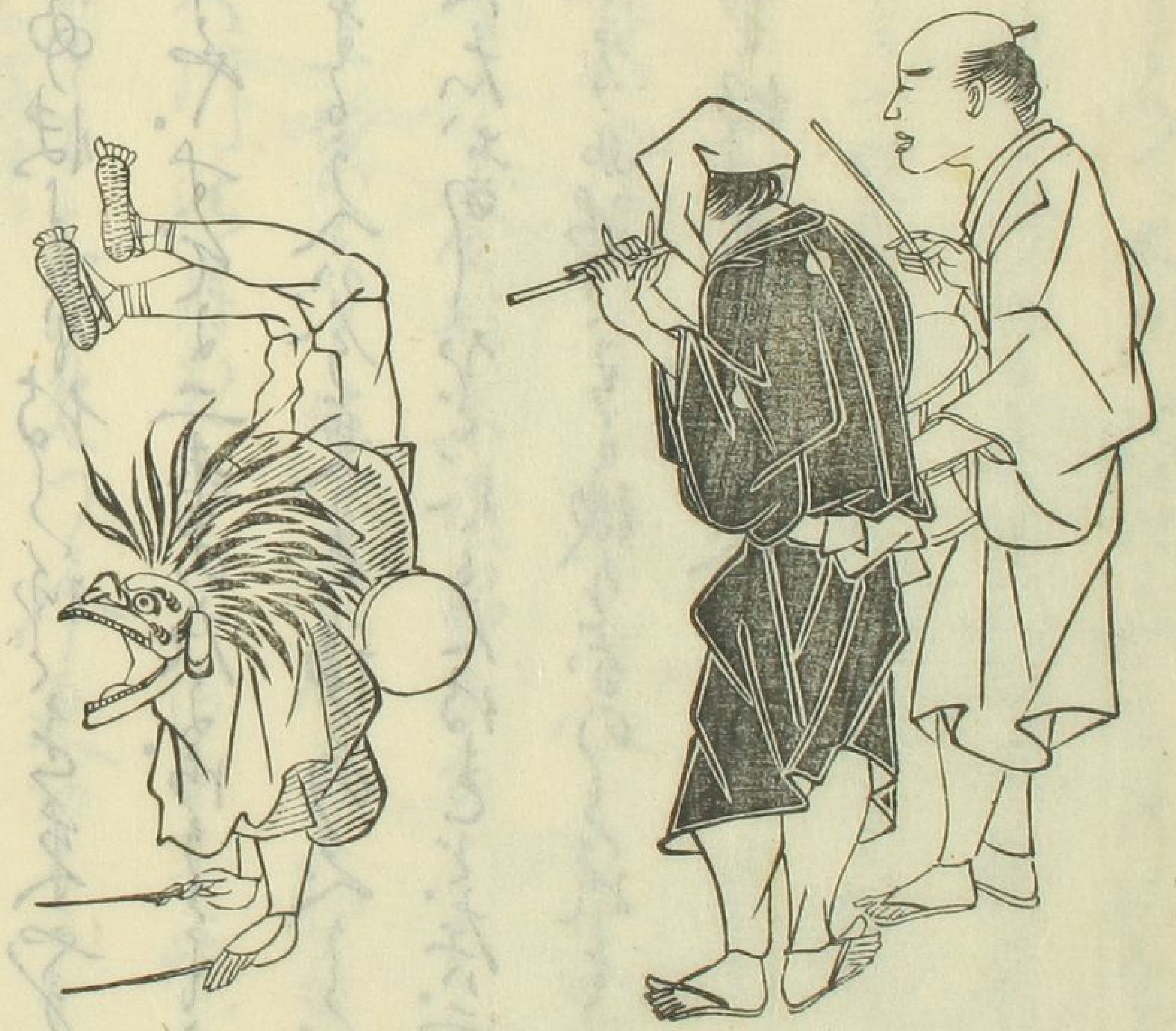
右 四ツ手かごかき

楊牙師の一葉うけて大川の月もやや秋をしるらん
神乃月日まさると也玉手行鶯の聲まねつき声
右方申云一葉うかべて何の事もきこへし楊牙
師の詮なくや　左方申旨判云一葉しるべてと
いふ事つくし屋形の屋根師が意よりなるは何事
楊牙師ぞ一葉と申侍べき左を非なきにおなじ
なれど大川の月のさまやまさりて侍る勝
楊牙師のこゝろまさりたの見へて今更何ようなし勝ぞ
おもふ事思ひやらせゆふべの空の鶯うくとよません便ぞなし

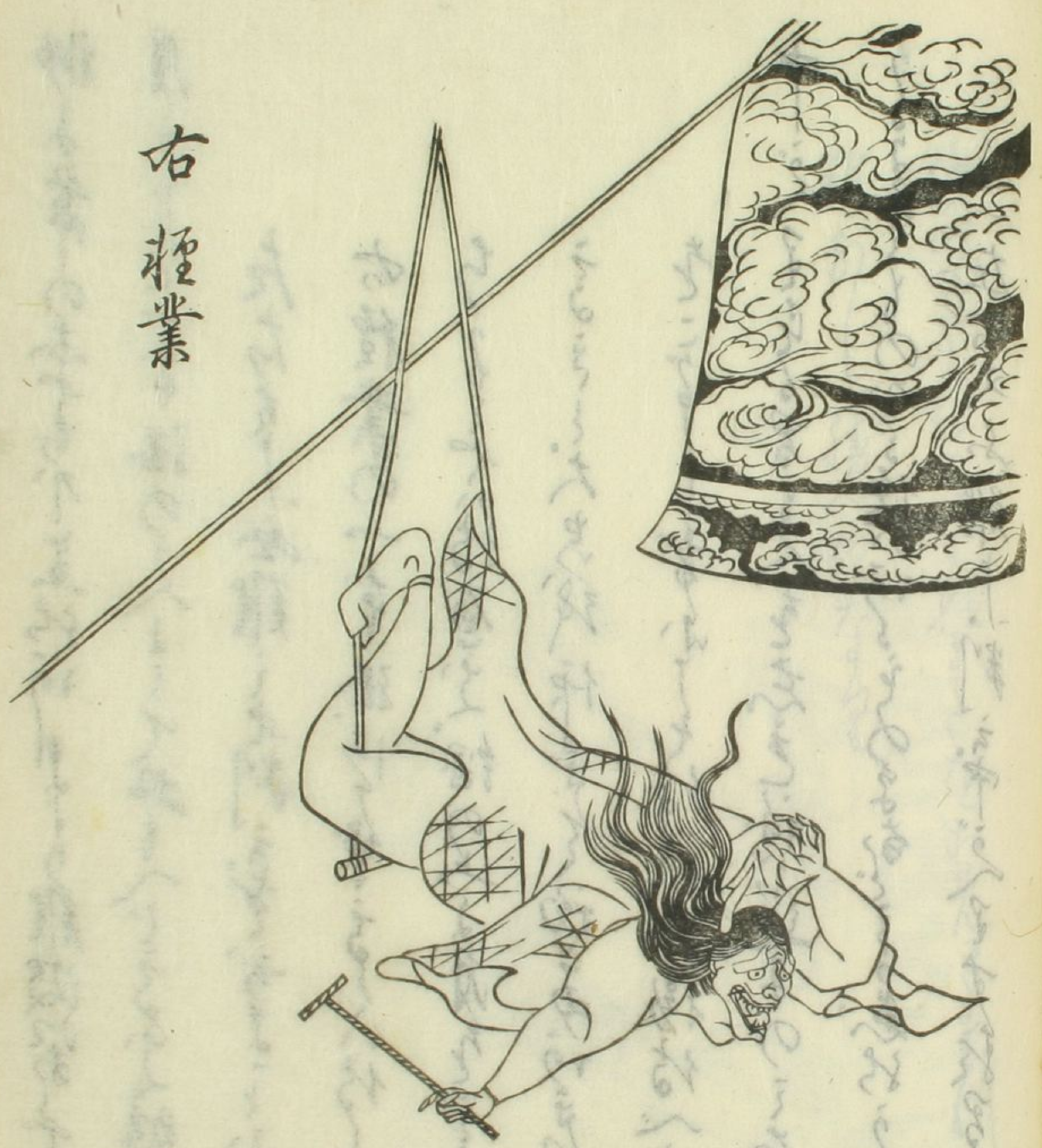
左右ともに雑也　判云右の歌えや八重ふべいのなま
まうひなる侍しくも侍る物ぐさ来やらくこゆる
ことなるやすでに二番のたよりもこえぬと
ゆめしまるうへは今更異論あるべからず左は
らまはたたいおなし　かどにこえ侍れど左は二首とも
初句に楊牙師とその職をよめるの心ありける頻尤
やんなきまゝ似よりまけ侍べし

十四番

左 覚之衛獅子



右 狸業



獅子舞の志やちかに立ぬれはまより難波潟ぞある月新
月このぎたを一本ぶ縒のうへよりて持もへだつるふ蜘ぞ根ぬる

左右中ニ無雛こせ判云それを言まこと小笠雛領

右種業の一本縒ちと継てるくハ侍らめぐく天よ
ちりまくやハ侍るなる縒の上よ月をとらへ出ぞへだ
るさしと大ちい我作ぎて初子がのまれつ見きむ
をここぎましあふてそ侍り抗左勝侍べし

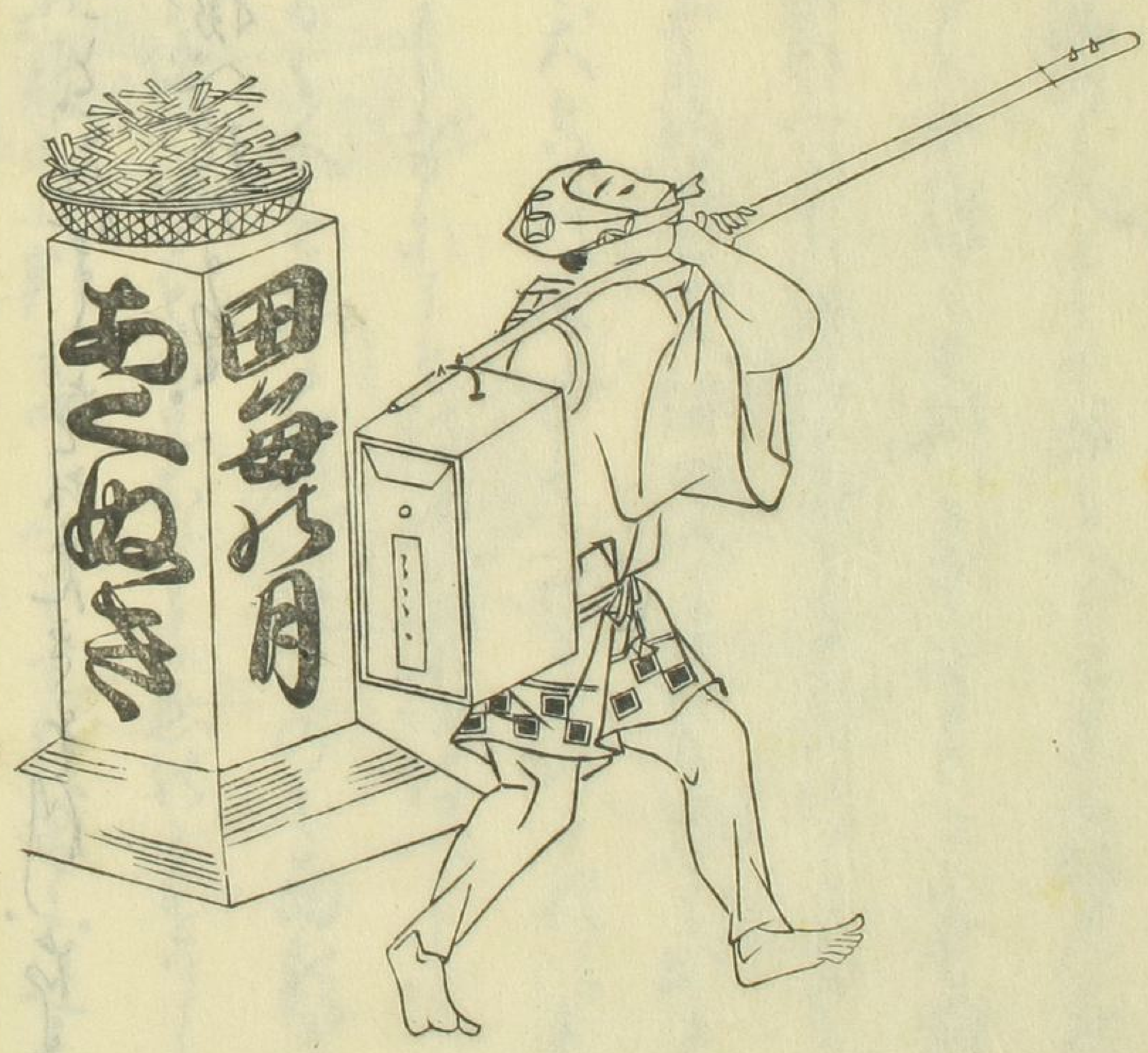
中ぶへまさる男も人を忘まい祈ば逆よのこ南新ぞ川
るまぎるものかる便ハいるとの宇都どうの急ぬうつりしあき

左右又ふ雛中ニ判云中ぶへ里す有男よ逆さまよ

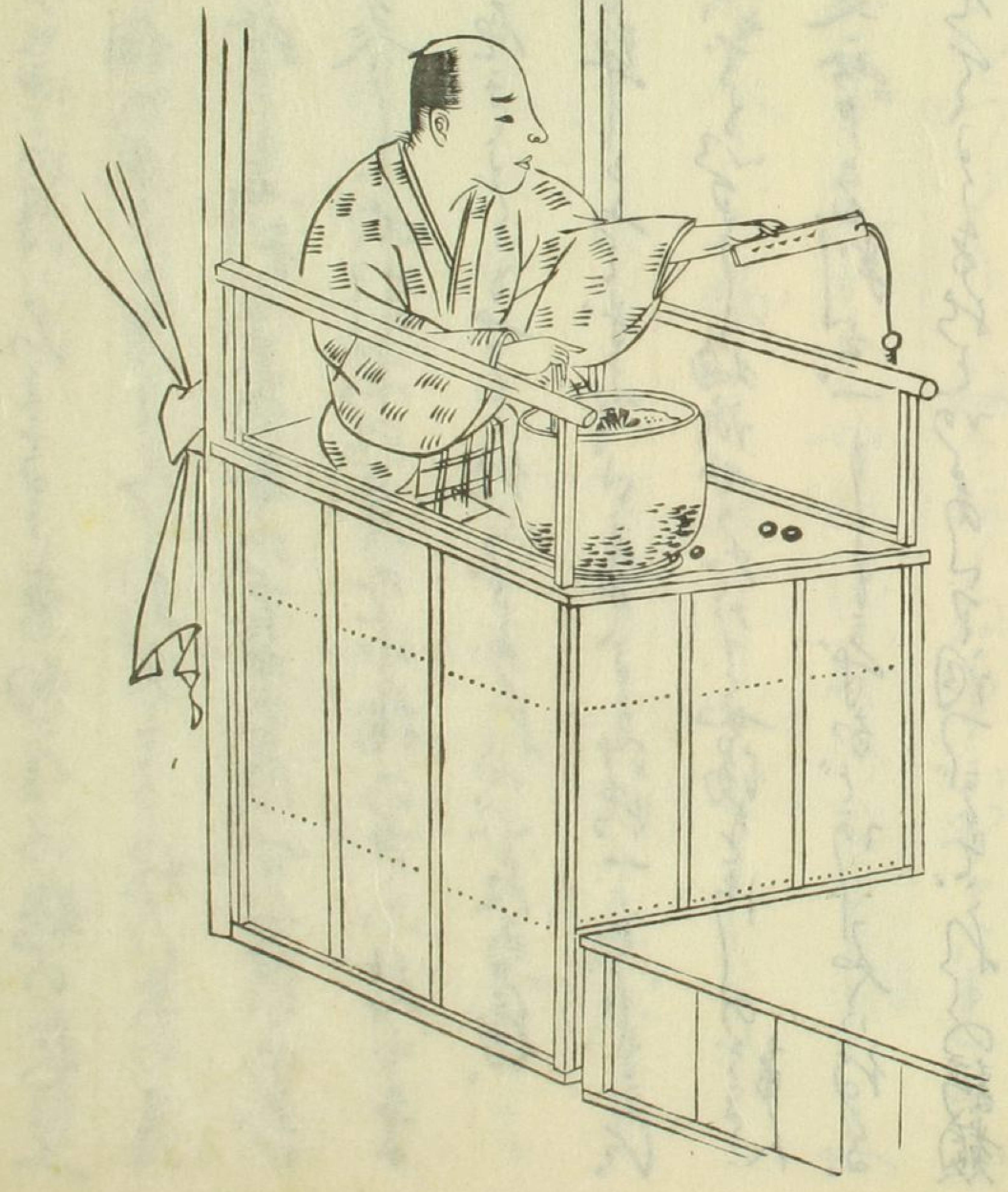
侍のるこむことふれまたを出見こきまそ川左方
雛方し勝べ北なるま

十五番

きそしや



六 湯屋

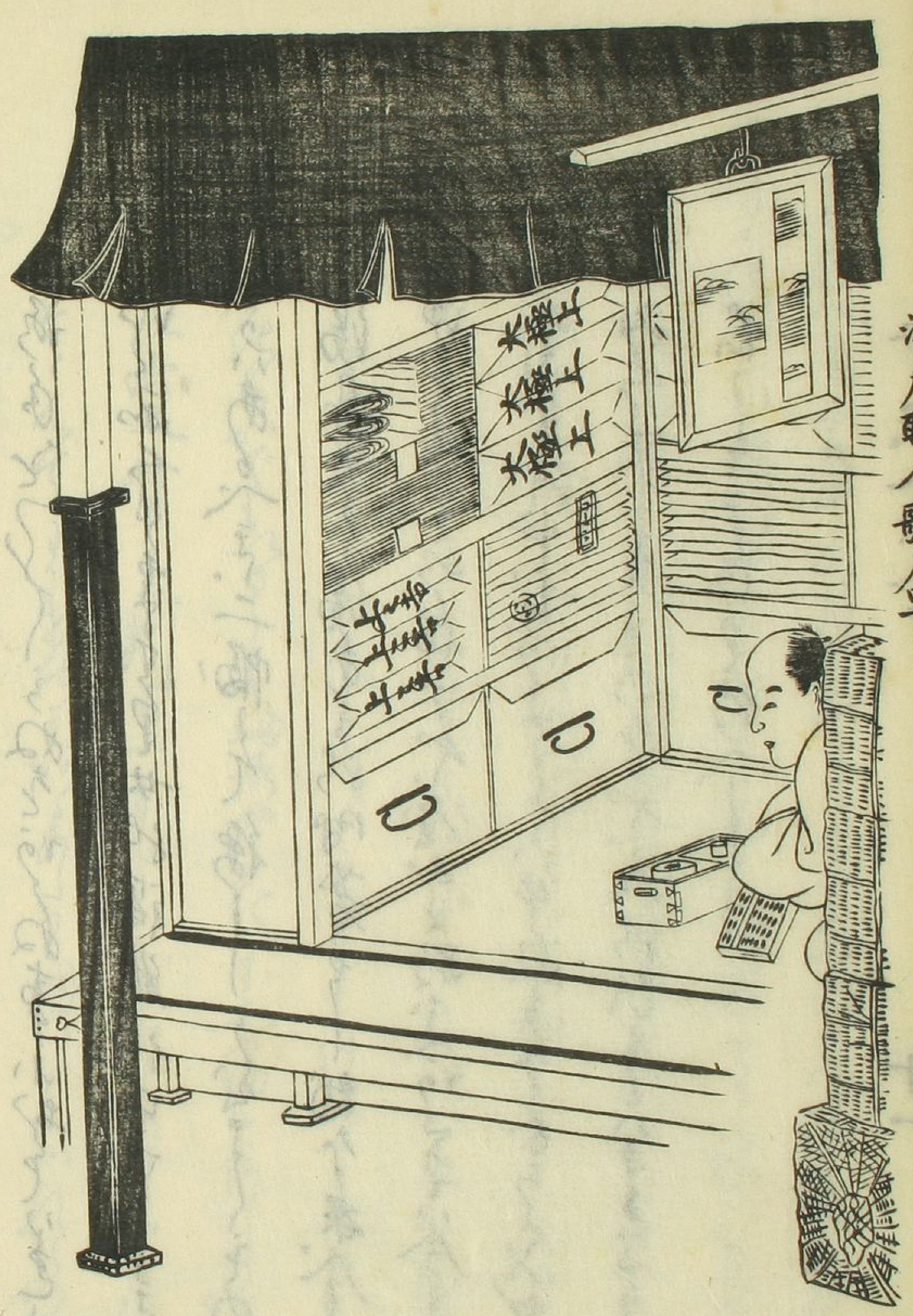


そゞろにへもこれ中の月は名にあへる東向廊の欄の秋の空
うつす湯船の小桶の中より影ゆえて引窓さらに昔の秋の月
左右番 判云。東向庵の窓中の月。すゞしかるへき
味なるべし。右引窓は月を小桶の中に待といふ
ても座さしもすゞしからずあれば、左の勝。
ひもつはのかゝる事しらずにもさえそれまたは一にとじもとに
行水すりならあいかでも目して始めやうたなき女湯をはしのぞきあん
左右又番 判云。一すじもとすなどいつやは待る。
まくれてもすみぬとのあしき詞つゞきにこれらの類
こきとちおるいよおぼし。并には推量し難くや。たゞま

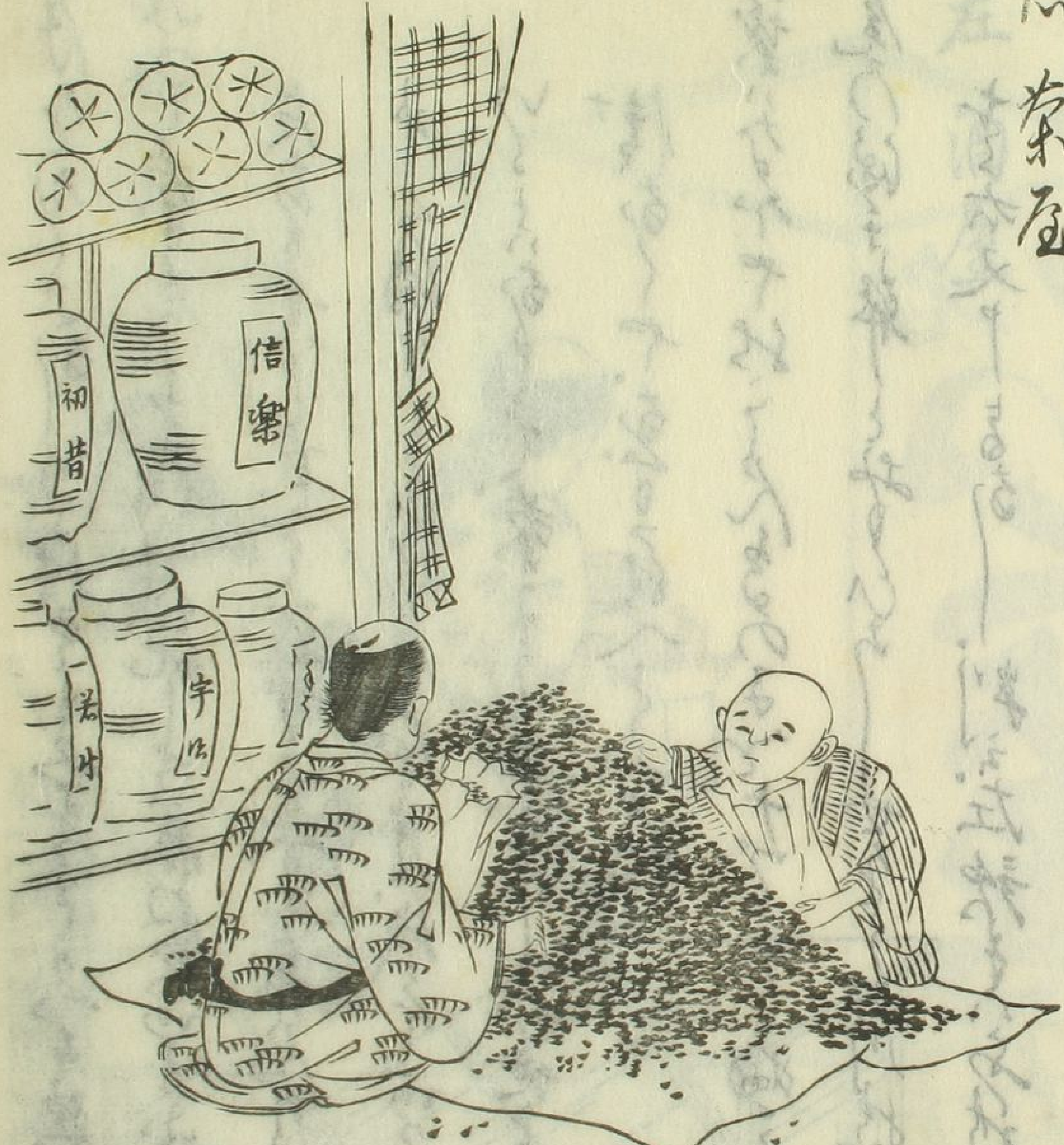
女湯は格子は残のをさして婦らやうちへ入らし
湯をとつてしらぬをいのぬ事にもおもひしなる。
いとみらず事ありて、女は裸形何の由しきを支
つゝあるべきに二幅して緑しうゐまくとのた。
湯具とて湯あるは附着せし物なる余今まで
ゆもじと云婦まや。宝おもとはやいいふものは今も一ちち
定ておもれども下にまとくいはれもなりやちらんやと
みつるし歩、とのちや。たゞはひもつはまゝたるとも
たのまてはを待つべし

十六番

左 紙屋



右 茶屋



てる月をみづゝおもしつゝ村雲もみえさきの人も猿末は秋風

花とのみへだ茶まうきれし心地して藤ね衣はさぬ月たえる隣人

左右共に背旨もなき歌すさへ一しぬん月のさだかなる

斗々油なくも侍らじ。右も月代をてりかれは、おもひ

いるよしあるまて茶まうしのもと待し心地もへるす。頌

情なしや。あずま雁へくる猿。

ことの葉はなすびやなにこんまめの子などナヅてナす姻にのくとも

池の尾の僧は鼻をおもひおし世をうぢ川なにかづらうぞき

右は又やよきなし。判云。左歌はあはれなちさり

右は絵なし。もの猿。

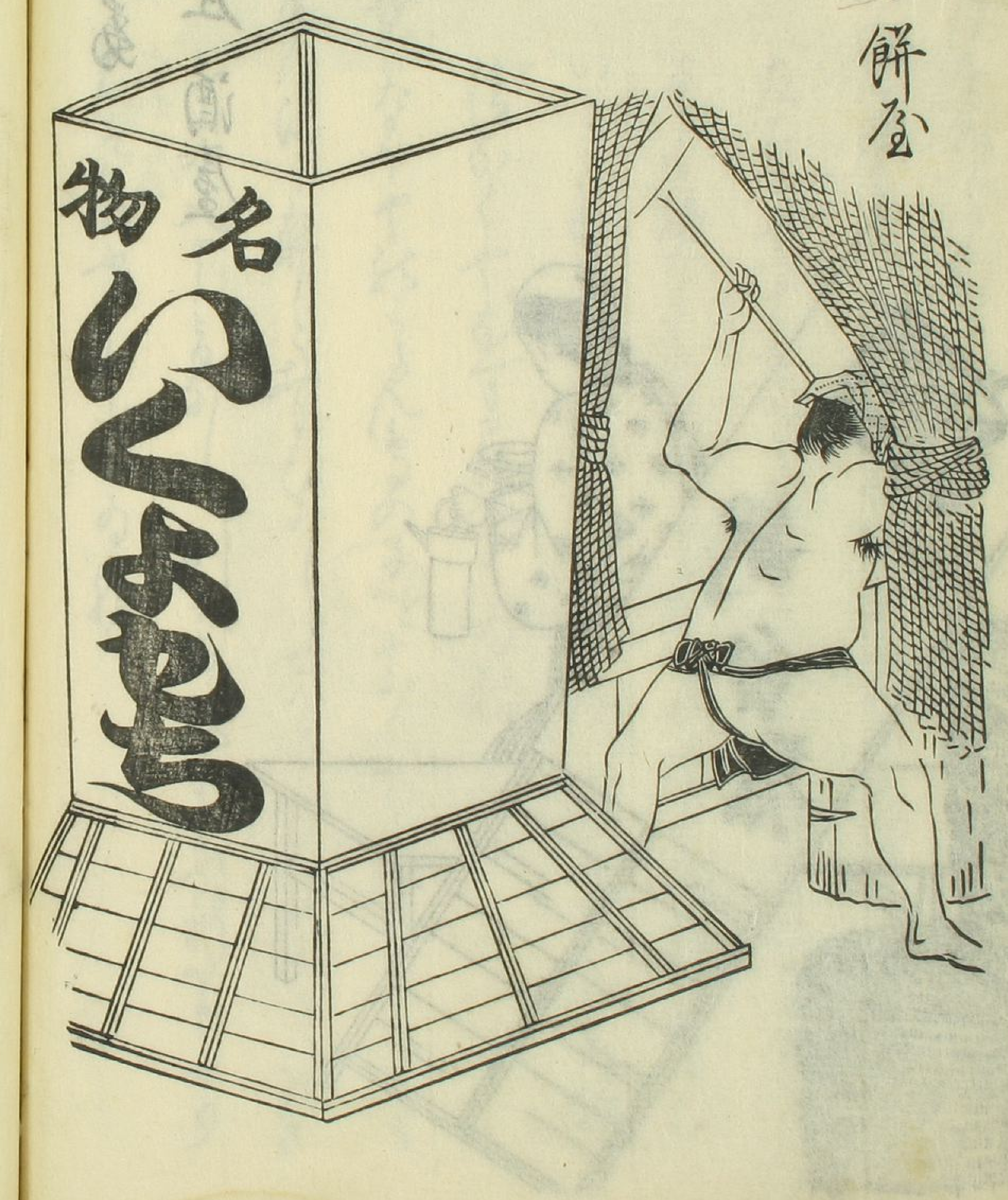
十七番

左

酒屋

都人にとはゞや立かへりもなす山の月やいかにぞ世を
西國の河辺乃月よりもまされぬいくよもちひぬ祢屋の枕で
右はしなのゝす山何ぞふかき隠れなき名なり。
左は云はゞ伊勢よりをいゝ都人といふべし。
判云、右をなす山は伊丹なれど都人かな歌よむ
なしてよまれたるを猶侍れど此歌はよし。
左ちるころの大和のみよし野をひたし陸奥乃
白川を思ひまでゆかぬと山城の白川によみ寄
せし心常に侍るや。左の歌いくよもちひぬ祢屋
の枕で いしるしをもてあさはかれて侍れば勝とすべしと

餅屋



負侍へし。

ふるくも今もさかゆへこそハ酒狗の客までハ何の切ふ謙へ

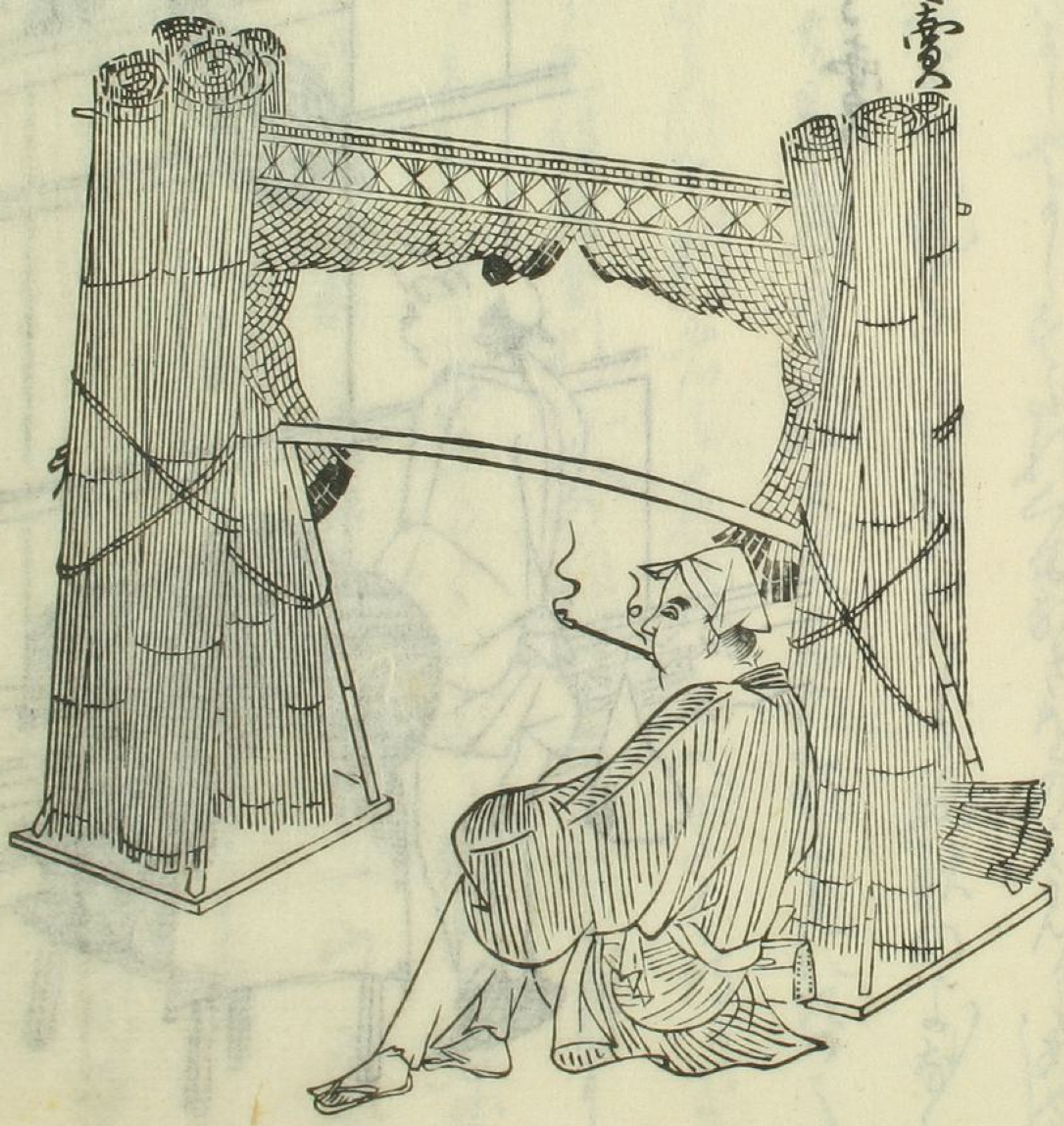
ねざめの酒のまいる文辞ハいつもりし今さへ取分しろお餘り

左右共不二難一申。判云。三河酒狗のかけハまさるまじ。

とのしうつゞきられて侍れバ右為勝。

十八番

左　みそ賣

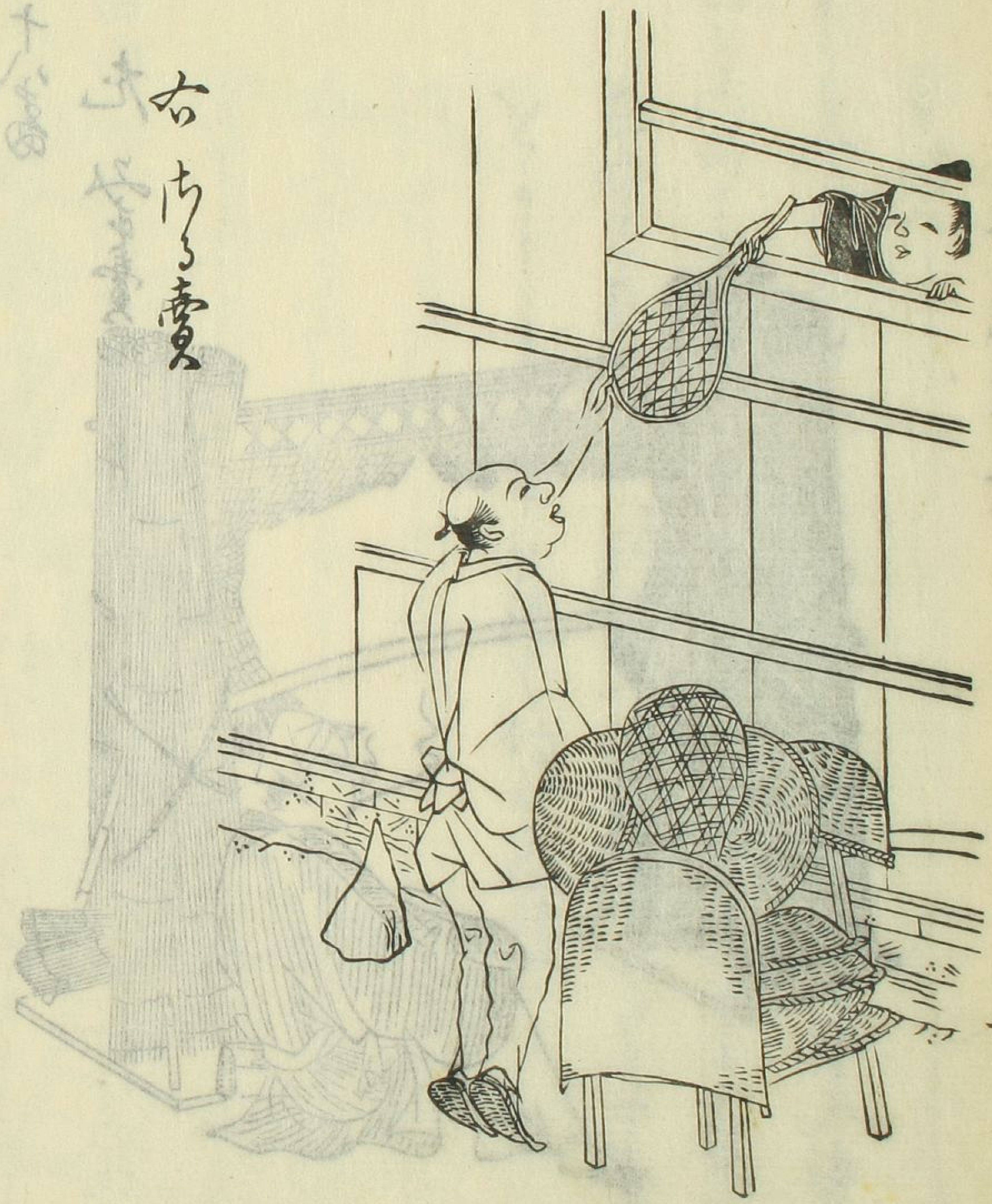


まづくとも月にはよしやよしあぶれん丸かきそのくさんかはあやなき
咲そめん人の目出花はこの月よめなしぬ秋のよなく
左右ともに歳寒いおなじ左右の歌ともに詠めことば
みちびきひて判者も慈服あさへざく侍りさ
待まてを侍るあれど人の目出花は月
色にあらそうかひはけるくおもひて侍るハ為勝
くもるな洗世々の栄乃ハむかしさいなおもひおべきこ一の盛なき
打よせて亀の子ざる稚菜代も水とこしなへと祝るましき
左右ともにともに判云せる左ハ前羽園亭乾

一の為持那季

十八番

古かご賣



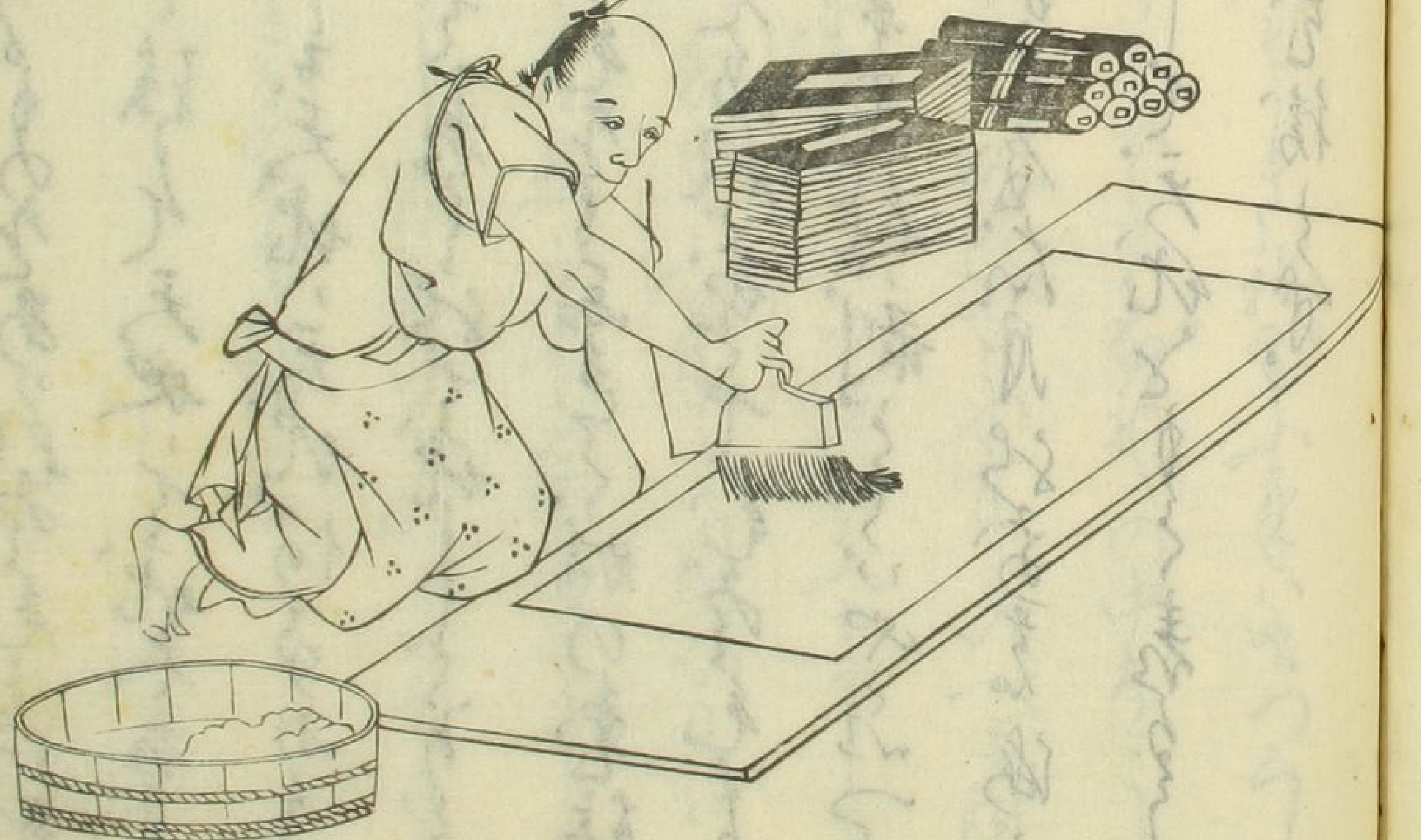
十九番

左

筆結

右

経師

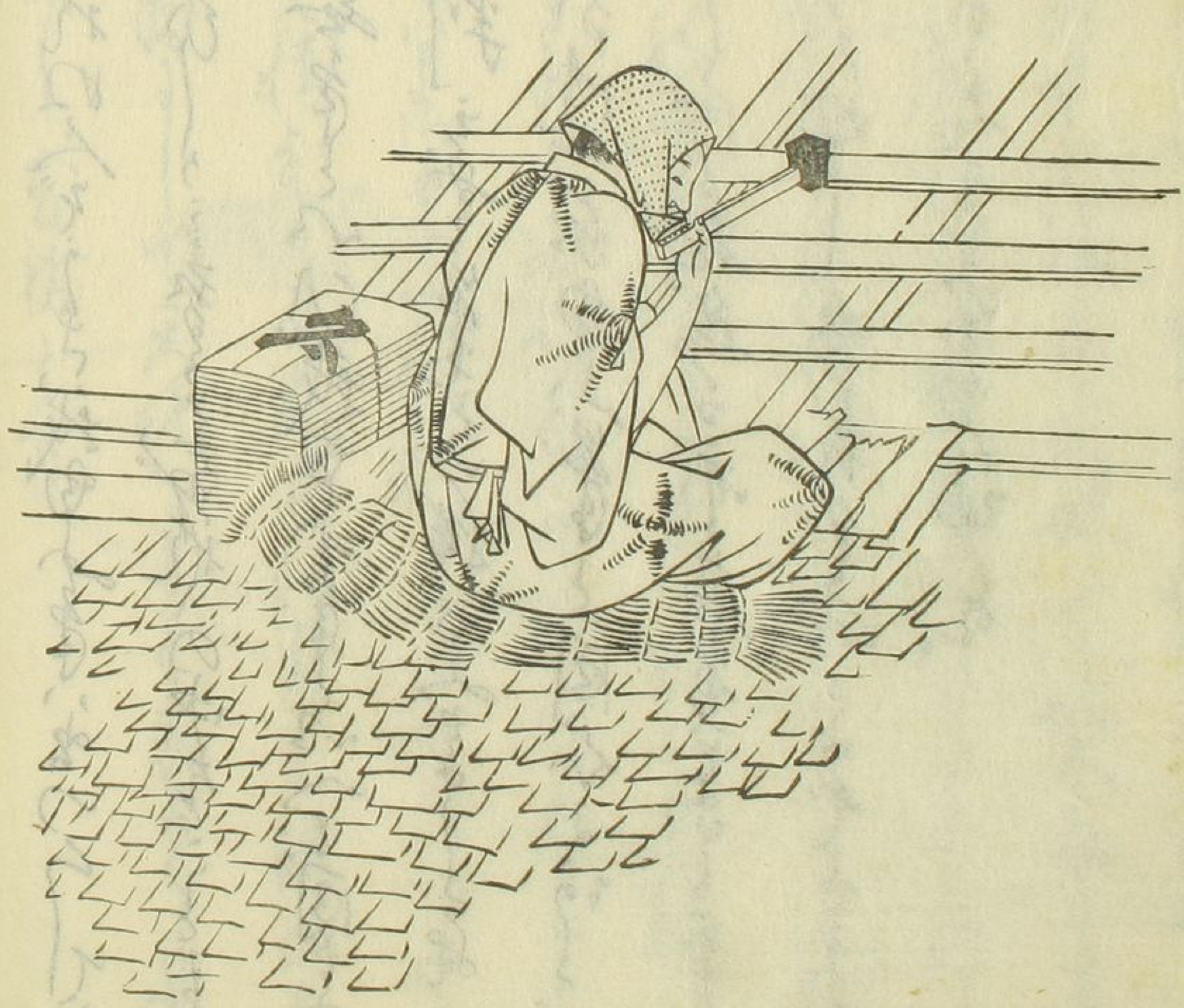


穂の類并月に兎毛もかゝるものなきあれば兎毛と云の説を定人
海山に兎毛も月のすゝ絃して天地ハ云地大表をさせ
右ハ雑中にて左ハ云天地ハ天地ハ何事ものう侍人。
陳云天地ちとて表をにて地ましくりと判云。
筆は職人の兎毛なも手ましく好の兎輪、筑
めづることいさゝかえあれど都にやむ兎毛より毛月
の兎は毛いまだ堅まれば剥としげやとへつるやう
ふもいかにて情なく皆左ハ月の兎毛海山左と。
一幅の画図ましていて天地ともく表をなしゝる。
見て和服なし左勝とす。

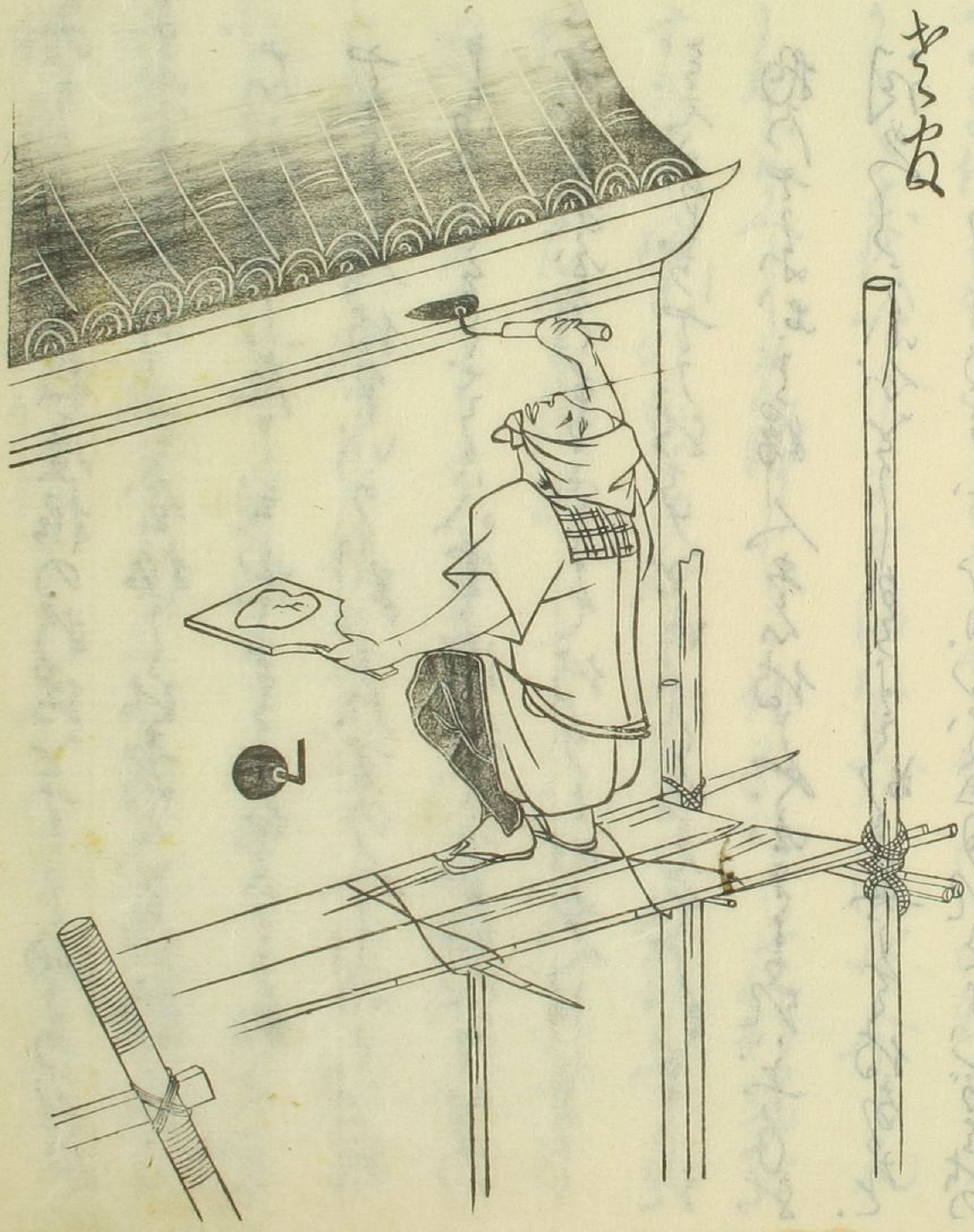
筆さてもことい我ぬ人ぞうまく我身の筆ハいふつらしても
うらむれども筆なきてちひしらぬ表を左我をれの中にとゝもまと
右雑中云筆をはひ我身の筆をはへる因なる記。
左筆中に二判云筆は筆と墨ハ文字ましれぬ
そのうるかれば我身ハ筆と同じくいつれ
帰とすべくしげる記然るに亦唐書をせざる事。
今の筆にちつ知し楽表をはとめてさう亦
持ちゃ勝するべきことかとの勝記。

廿番

左 屋根葺



右 左官



月のかげのりくみは板屋根の打端をすこし物さの出たるや
中ぬ事に字をのおして屋根しらむいは白地状のよろしく
右に難じ．左に云なむ夫るさかどいまぬるすかれ
やうにや人．侍りいのど判云．左方の人しのさと雖
やはうくとこくせらるは八雲御抄に見ゆれてはり
ぶかいさ方にかきさうそて侍かくのあへりける
こえるもちやう好るすとはりくらえそいもすじ地
拘乃やうふいむき婦人せん侍るやはさきよい上手好
詞めつうふいとしまりまく好る具よて侍るなと．
させるめりも好事方かも見なくて青地とよむとは

るるは侍りさるとよくこそあらめ．かものの沙日をえ．
うくて式代のよしとも海ぬ見なる拡は唯今まん
まくえ人し免べ陳ぐしう侍るへじ．たれ板端を
すらし物さの出そずやと心得るも．直けふうくい
侍きど．右は当代かしてとい思ひ川まいはさと
以へるびとかくして了る侍れ．勝侍べし．
詞ひこても拘いふ事好りられば見よふくろし打もらぬ免れし
久祢ごとふも等所きいひ屋好うし式庭をし偽ぞ地
右方ふ難じ．左方に云．右は可頗感心．判云くてぞ
読．屋根葺の．竹釘字ほよふくむ事は屋根よ

のぼりてつるすに侍べし。されど屋の上にすまば。猶
がゝ判者むは。勝劣なる歟。されど半なり
猶をかしく侍れば。左の方勝とこそ。
さることなれどおかしく勝と定侍べし。

廿一番

左

畳刺

ましろなるはらみゆすべりて数はゆきどもよひの月よ志く摘ぞおかしき

月まうきぞん弟やきし浮つきど小兒くりませよ秋草の秋風

左のたゝや与右よし　判云こよひの月りしく

摘ぞおかしどうしう持の勝之

たしかへて去秋秋はやきとある事も哥し　左は秋よとぞひとめる

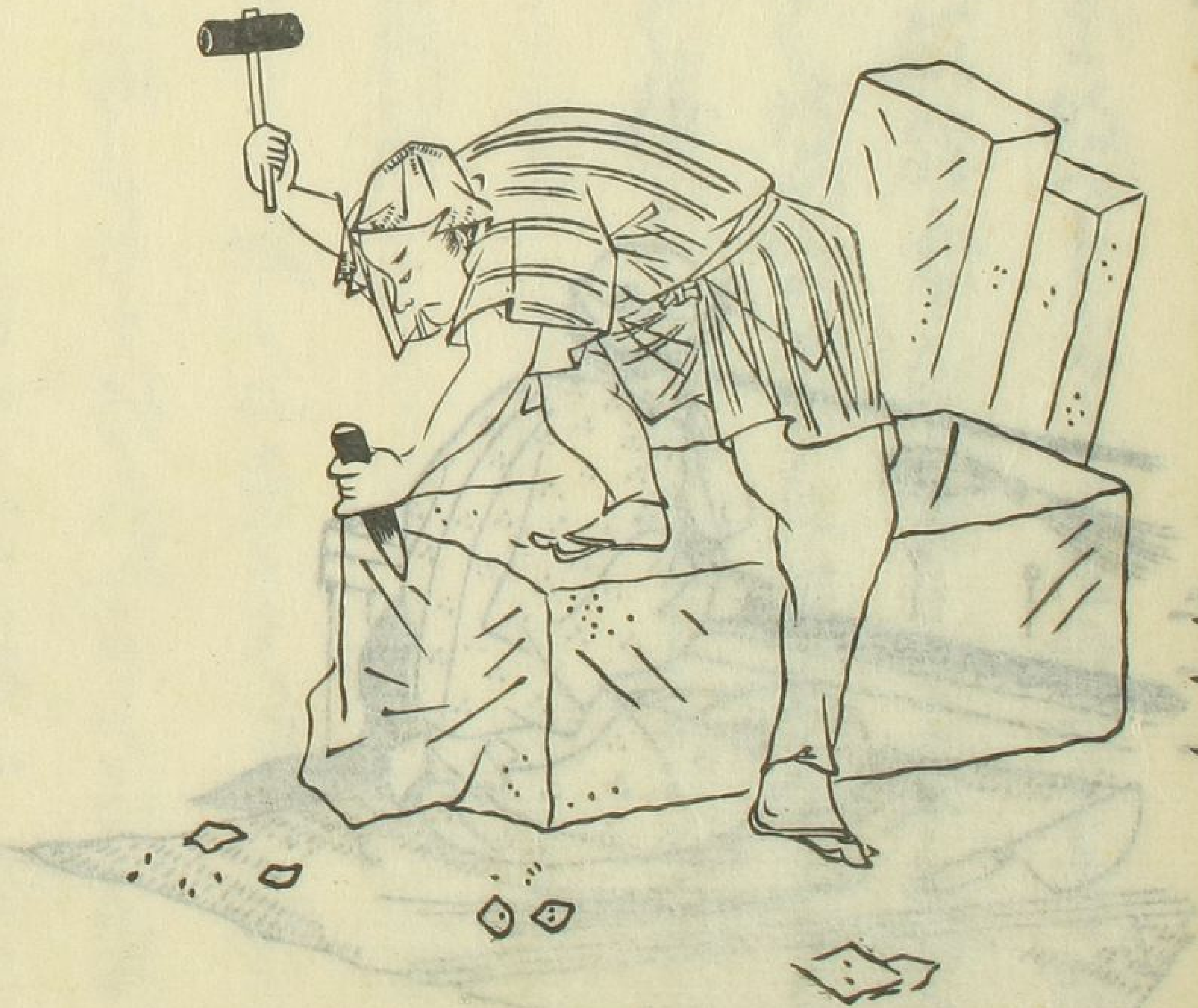
ゆふさとはうきぞり新秋坂屋敷ながら石垣年はつ兒ども

左右共文章よろし　判云いも哥ともに秋まかぶひとし

ぬすめいとよ添しくも侍るおもながの石垣ともまり

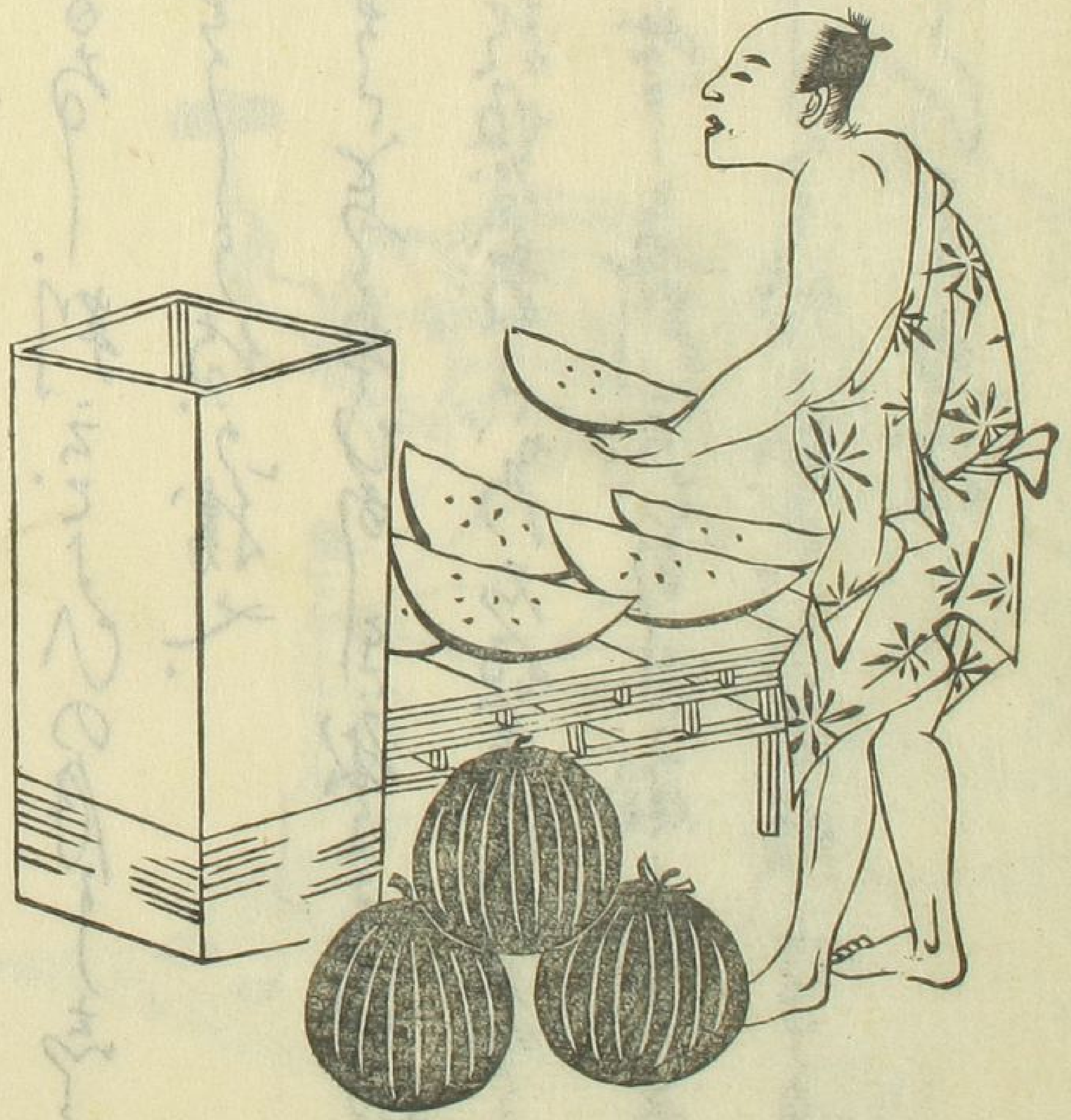
合せよろしくしぼえてる持

右　石切

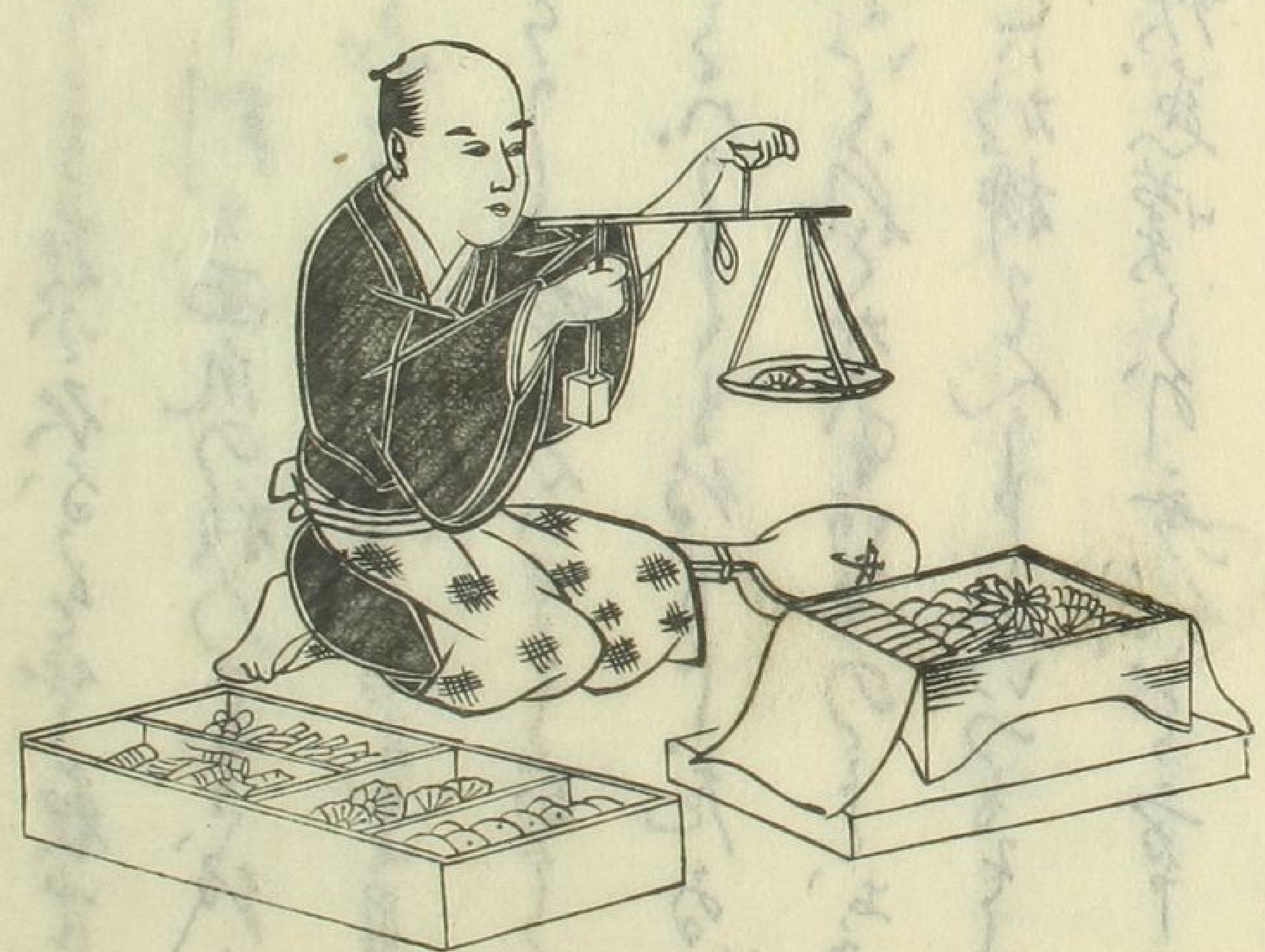


廿二番

左 水くわしや



右 上菓子屋



立ちよるの西風も物とく庵ずらしかの坑月秋に何かよふ入
くばりよするの秋月たちよる秋に衣ふかき秋寺秋深る
左右ともに難なし一判云西風の独乃景色殊ふ面白
いろなされたるがたしきうへにあかの月秋になど
いひしらずとうしろもいはざるとあやしく秋も
うちぬる宍中ろへるまくも侍れど左為勝

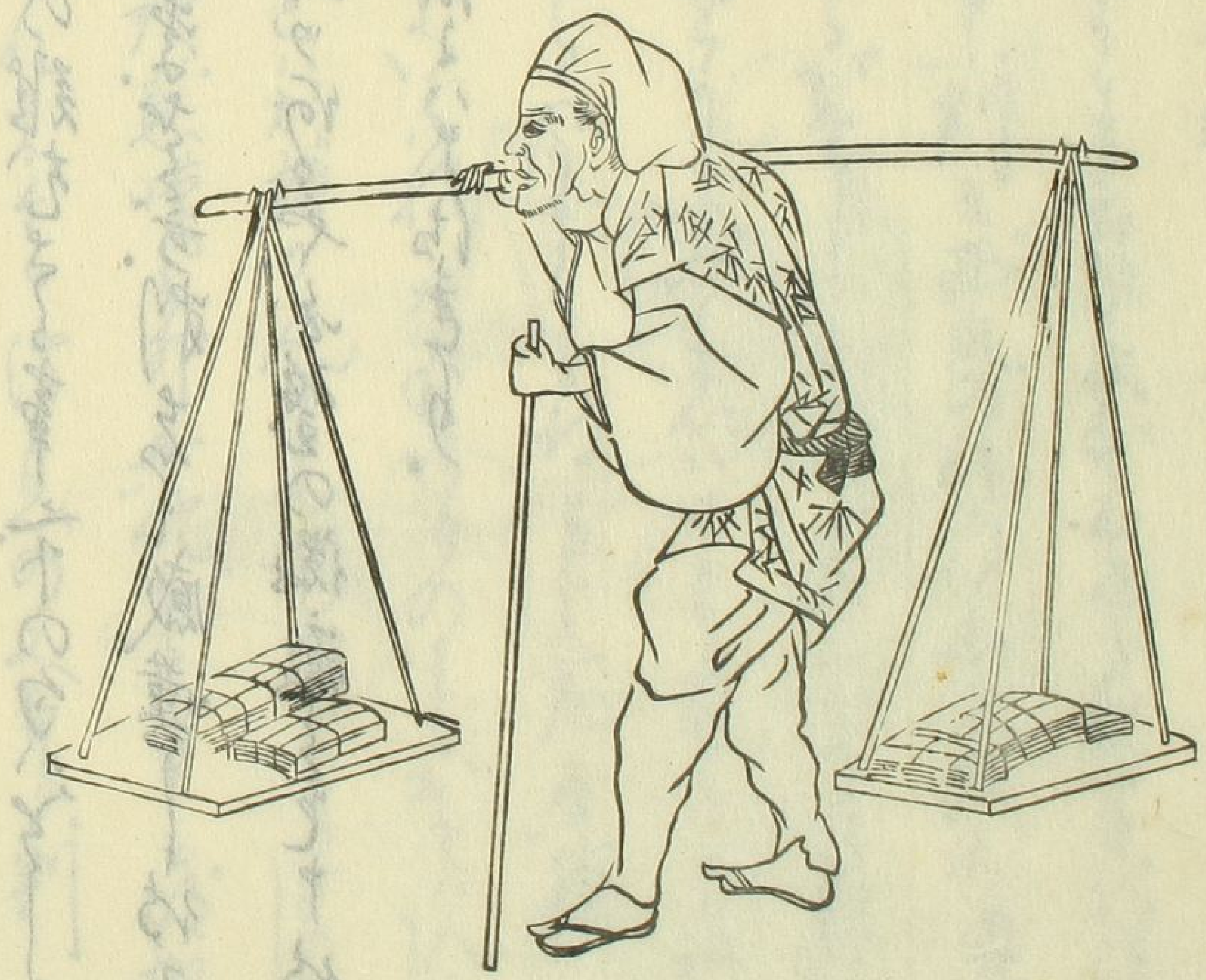
今は世にあるしと清き人よいはれんなむかのこと、おもひんも
しまんとふへどこち秋とある八右歌まへしやいつもそらごの秋んで
右方申云左歌趣嘆ふ有雲花を方申云右歌撥よ
歌は読とよもしれるまで消息の文あり判云

右歌、歌の難なき事之下の句、少しおさ字
遣るに侍るを判者も感嘆し侍るは、殊
めでたし月二ツ何々や、雲麗の微瑕とも申侍らん
右持ど歌右よハ勝る侍ます。

古箒賣

廿三番

き付木賣

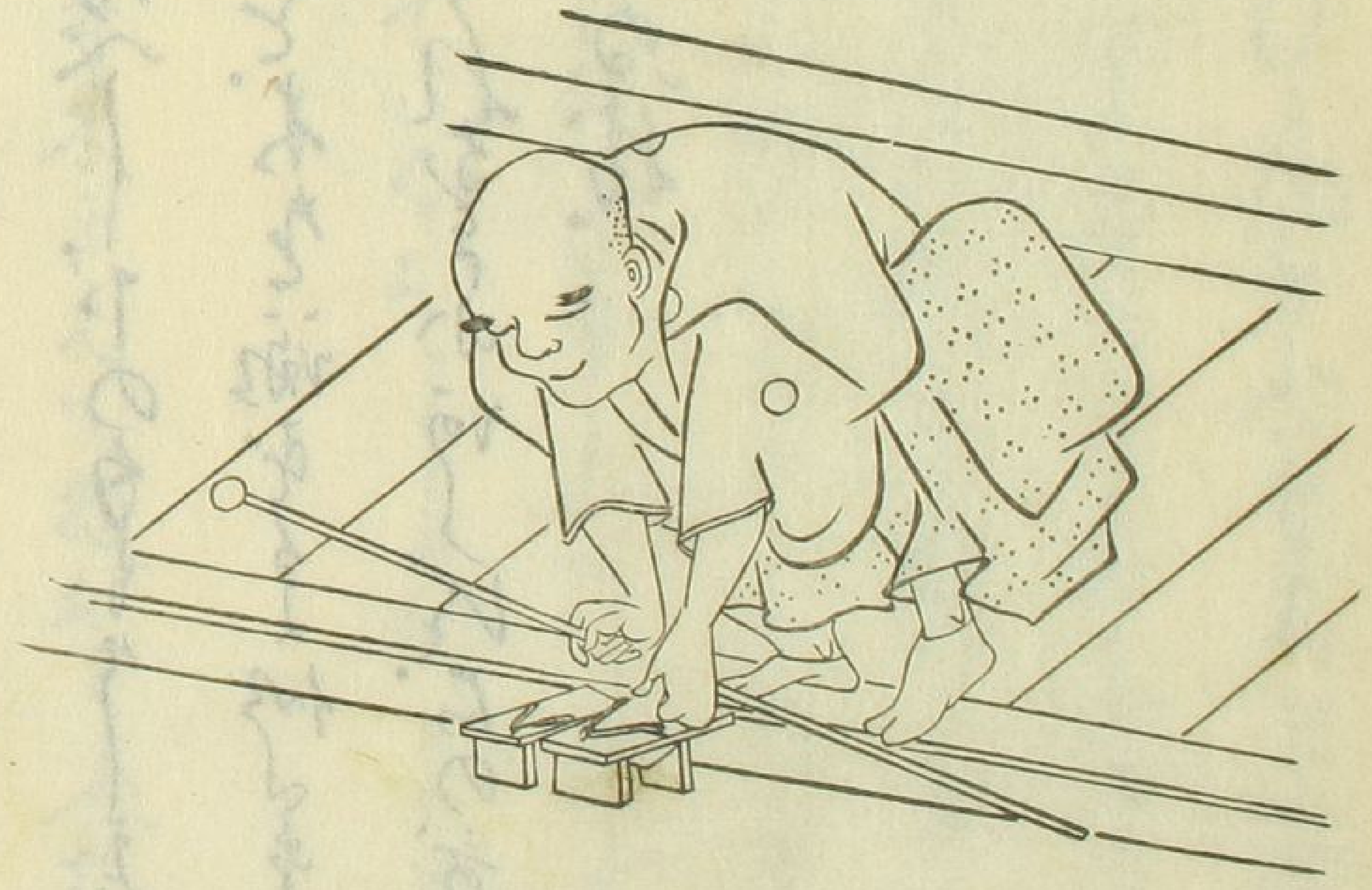


灯火もなちて月たにやあかむせんさくは舟木とふ人もなし
月残めづる人のこと紫やまつてき蓬りをなる雲ものこさず
左右共に普請判云左の歌はた職のうたへ小月影
河の手残りしむかしの謌どもあるなかにや居事左方
むらさきといひあかるよみてあるかの森井のうた
草ひかよみのかえてはいにしへより似て雲も持ちて
侍べし。
さて我ばかりまさん事も安舟木さえて捐ねやふ我や何ある
そのかり居ふとやはほとも物あらざるとおもひくらべ給ふものかまとりて
右中云普請雑中達左中云右歌末をと詠ぜる気。

判云左はすぐれに普請なり右歌は岸をば詳にも
おもしろき残といへる重居あらはれぬぶせきものの
みさまえをとしう侍べし下の句もそしうはいかにぞ
すべくよきうたあると末をと詠ぜるよ似て雲とも雑
中ぎりし案そのいちれあさきに河うし右の方勝
あるよりもいはるる勝。

廿四番

左 座頭



右 山伏

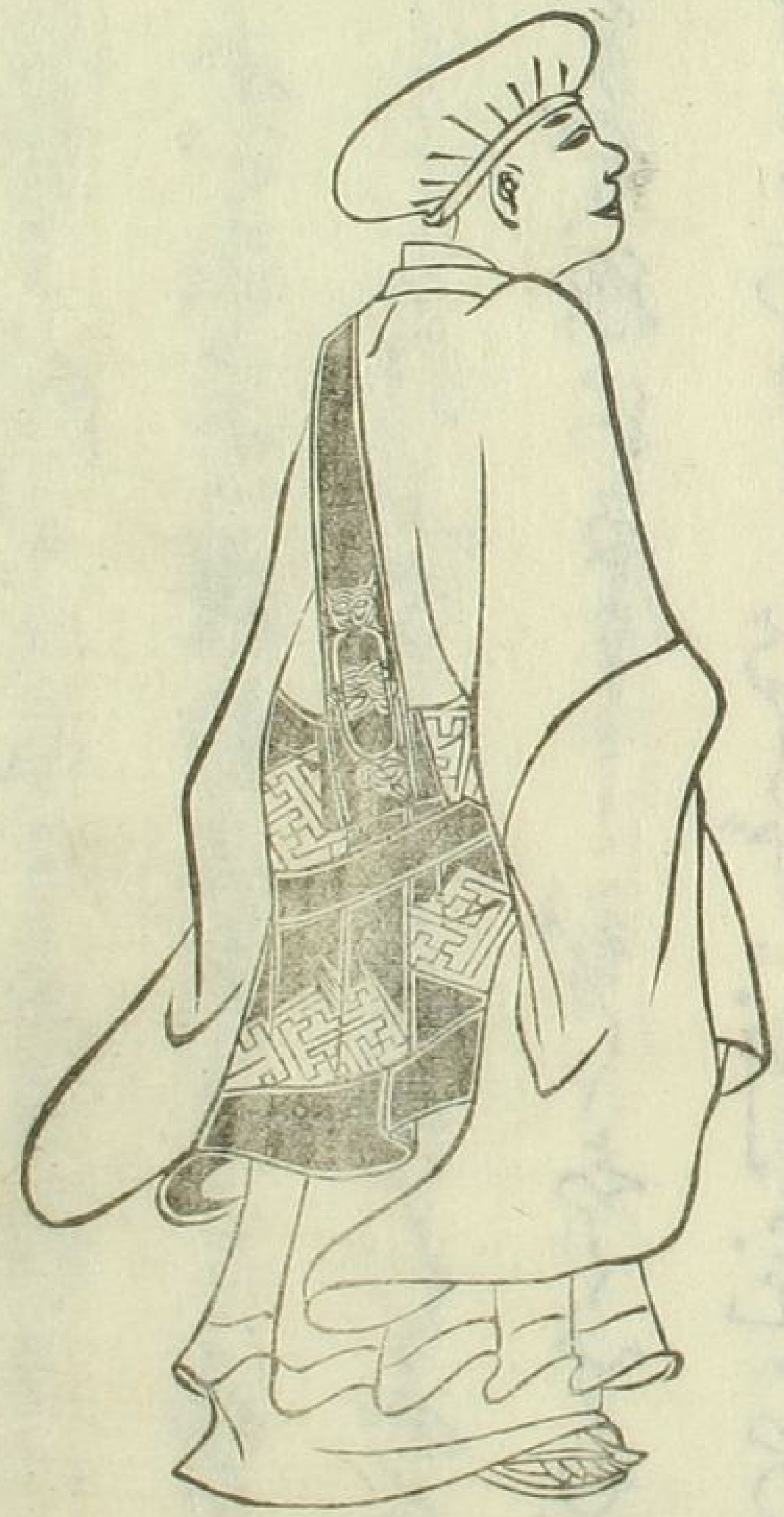
名をたかきうちハいざよひの山秋も空なるまでつゝく紫(?)せらく
月をこそ法螺のくまなきつねよなる貝ふかれども
左の歌 判云 空なるまでつゝくハさる道は
頻視摸とする事なるべけれど上の句ふ職分のあ
なくて遺恨なる事にきこえ侍る 右ハ十三段もそ
きゝ入侍るといへどいざよひハおもひのほかや侍らむ
なに子よまれて月残なる見入あはれの法
しず 法螺の音もちまじぎなり 右の猪
まれなるゝみえても心ハなすさま人悪をめくりて猶よ持りける
峰入りしまんだらとしてや心ひのうきよりのことの葉もなし

此歌中二 兼ともに一 判云 左右ともに仏師の歌
言なるふとりく 左も下の句平懐なり 右も
まけ事持べきなり

廿五番

左 念佛宗

右 題目宗



西方ハ心けくもはしいづる月にくまなくらし沙むくし世
月も月業くれまちぞ鬼子母神　十羅刹女も冥加ありかせへ
きこゆる那也　一判云左右の歌勝劣ハなき持
外人ハりとおもふに家宗ハ雜修といひくさしめなりひぞ
口くやに惡しけりしけるぶやくと自我偈むかへ人の御もん
なりと云を宗の經にあらしこゝろ志くるゝ也。左歌に云。
清ぶ屋くをいふまで侍らずや。判云左右の經句。
にかなふかいも侍るぞや。釈教の事ハ字さるゝま
入まじりたるなど聞ゆるの事もよくのみなり。
是れハなかハおとるべくや持まで侍べし。

廿五番もゝ色ぬ事るれ秋ハな月もありあれども秋なん
みじか夜まで葛西のうき横あをの宿へらく
くまハこよひのりものてんことまし九月十八る此寄
遠う見あれ父く又こゝに通夜しあひとのこりの宿をと
ちぎりくるへとふよるまめともひよりもしれんくせうの
日よハ事にかへぬべし夜もあかりけいとやはらるべし
などロくよりふなきもゑまん吉大士くあしはおぐみて立ぬへき
事しまかれバされも立さりぬなるしきるまとも河なれ
のちは秋ハすこしもいつあるまの光にいつ望九月十三夜

あいやんといふあれバされもおひまでもて来て歌合
ゆうそんやそいおとゆ婦てかふつ涼まぬいうじれすきものや.

右江戸職人哥合文化二年七月十日於浅草寺宥之残部千貝所図
書也依為莫逆被聆傳寫池南播紳荘屋主芸圏以物之跡之享之
市以為此屋可尚無狂有四山城今日職人源浴文化楷於喜悦之
民安久至治也

石原